

獅子山楚王陵出土黄金飾貝帯をめぐって

近藤 喬 一

趙武靈王の胡服騎射

獅子山楚王陵と黄金飾貝帯

春秋戦国時代の貝帯とは

漢代の黄金（鍍金・銅）飾貝帯

春秋戦国の黄金具帯と西漢の黄金飾貝帯

趙武靈王の胡服騎射

『史記・趙世家』によれば、趙鞅の七代の後の武靈王は治世の十九年（B.C.307）に胡服を採用した。動機は三方を囲む胡（西に林胡、北に樓煩、東に白狄の中山）を伐つためにはどうしても車戦ではなく騎射戦に習熟する必要があると考えたからであった。群臣が中国の礼節衣裳に執着するのに対して、それぞれの国にはそれぞれの風があって良いのだと説得したとある。俗を胡服に変じ騎射を習いその結果、北は林胡、樓煩を破り長城を築き、代並びに陰山の下より高闕に至る塞をつくり雲中・雁門・代郡を置いた。

問題はそのことを記した『戦国策』と『淮南子』の言葉の違いにある。『戦国策』は縦横家の議論を主としたといわれ、漢の劉向の編になる。『淮南子』を撰した淮南王劉安は高祖の孫で、多数の賓客による道家的宇宙観を主とするといわれる。どちらがより古い文献かという判断はここではさしひかえたい。『戦国策・趙策』卷十九「王立周紹為傳」の条には、「遂に周紹に胡服衣冠、具帯、黄金師比を賜い、以って王子を傳せしむるなり」とある。南宋の鮑彪の重定次序の新注本には「具帯」のところに注して、「帯飾の備わるなり、なお具劍のごとし」といい、元の呉師道はそれに補として「淮南子に云う、趙武靈王は具帯・鷓鴣にして朝す」ここ「具」を以って「貝」に作る。『漢書・佞幸伝』には「孝惠の時、郎・侍中みな鷓鴣を冠り貝帯す」とあり注に「貝を以って帯を飾る」とあると指摘している。

『淮南子』卷九「主術訓」には「楚文王、^{かいかん}獬冠を服するを好み楚国之に^{なら}效う。趙武靈王は貝帯、鷓鴣にして朝す。趙国之に化す。匹夫・布衣に在らしむ。獬冠を冠り、貝帯を帶し鷓鴣して朝すといえども則ち人の笑いを為すを免れず…」とある。漢の高誘の注に「趙武靈王は春秋の後に

でて、大貝を以って帯を飾り胡服す。鷓鴣は読んで私鉞頭の二字三音を曰うなり。郭洛帯と曰うは銚鑄を位するなり。…」とある。整理すると古い文献では『戦国策』には「貝帯」とあり、『淮南子』と『漢書』には「貝帯」とある。

王国維は早くに「胡服考」¹ を書いて先の点にも触れた上で、さらに『史記』と『漢書』の「匈奴伝」にでてくる「黄金飾貝帯」を問題にした。王国維によれば貝と具の二字は形が近く、従って伝写する間に訛ることが多かった。顔師古の注する『漢書・佞幸伝』には、貝帯とは海貝(寶貝)を帯に飾ったものを云うとある。しかしこの帯はもともと胡制(北方遊牧系民族の製品)である。胡地は水に乏しく寶貝を得るのはきわめて難しい。かつまた黄金を以って帯を飾るのに、更にそのうえ寶貝を以って飾ろうとは、飾ろうとしても無理だ。従って貝(帯)でなく具(帯)とするのを是とすると。そして具帯とは黄金具帯の略だと。なお『漢書』の「雋不疑伝」にいう「櫛具劍」、^{らい}「王莽伝」の云う「玉具劍」といった呼び方と同じだと主張した。

王国維は胡帯の実態がまだほとんどまったくわからない時に、胡服の一部として具帯〔黄金具帯〕か貝帯かを問題にし、匈奴などの活躍した北方草原地帯での寶貝の入手はきわめて困難とする当時の常識的な判断から、貝帯は具帯のまちがいと、具帯は黄金具帯の略であろうとした。この点を再考するきっかけとなったのが、徐州獅子山西漢楚王陵から発見された黄金帯釦綴貝腰帯である。

獅子山楚王陵と黄金飾貝帯

獅子山楚王陵(第1図A1)とは 1984年12月江蘇省徐州市獅子山西麓で一群の兵馬俑群²が発見された。7年後その主人の墓葬³が探し出され、1994年12月から翌年の3月にかけて発掘が行われた。獅子山は徐州市の東郊にある東西に走る石灰岩の山峰で海拔62.15m、主峰上には人工の盛土が行われていた。墓は獅子山の南斜面に頭を北にして掘りこまれた崖洞墓で、先の兵馬俑群の東約400mに位置している。南北全長117、東西の最も寛いところ13.2m、外・内墓道、耳室、甬道、側室、棺室、後室からなりたっている。甬道以下は石灰岩の岩山を掘りこんでつくる。外・内墓道は露天の部分につくりこまれたが、内墓道は天井を設ける。外・内墓道と内墓道天井の上部は粘土をつき固めて覆い、さらにその上に1~2トンの自然石を全面に置いていた。

内墓道の両側には東側にE1、西側にW1、W2と番号づけられた耳室がある。E1は厨房、W1は府庫、W2は貯蔵室かと出土品から考えられている。主体部の盗掘を急ぐあまりこれらの耳室を見逃したのか、盗掘をまぬがれていた。巨大な塞石16個をもって塞いだ全長約10mの甬道(簡道と朱書してある)を抜けると東側にE2~E6の5個の耳室が、西側にW3~W5の3個の部屋が掘りこまれていた。E2は銭庫、E3は未完成、E4は30才前後の女性の陪葬が、E5も女性の陪葬があったと判断されている。W4は貯蔵室、W5とE6は甬道を挟んで対応してい

る。W5では壁面と天井が仕上げられていない。玉璧などの玉器、漆棺に嵌めこんだ碧玉からなる紋様の一部が残る。E6では室床面が甬道より25cmほど高く棺床のようになる。頭骨などから男性で35～37歳ぐらいと判断され墓主と推定された。後室は宴飲の部屋かという。陪葬は外墓道の一番奥、内墓道に接する東側からも40余歳の男子が発見されている。「食官監印」の橋形鈕銅印を伴う。飲食に責任をもつ人物かという。

黄金帯釦綴貝腰帯 内墓道西側耳室W1（第1図A2）から出土した。内墓道から通じる過道の幅0.92、高1.8、奥行1.61m、封門石を除くと木門がある。耳室は内墓道にそって南北に長く、長6.2、幅3.1、高1.8mを測る。室内には兵器、銅容器、玉器が主で兵器は青銅・鉄製の両種を含む。封泥が19個発見されており、「楚中尉印」、「内史之印」「楚太倉印」などがある。問題の金釦綴貝腰帯（第1図A3）は封門を入れてまっすぐ西壁につきあたる少し手前、南北方向に二組の絹織の帯（『文物』1998-8の報告ではいうが、革帯ではないのか）が、上下に重なった状態で発見された。すぐ近くには武器がたばねられ重なった状態で出土し、武器の間から封泥がいくつか発見されている。金釦綴貝腰帯もこれらの武器類とあるいは関係をもっているかとも考える。盗掘されていないが浸水で原位置から移動している可能性があると報告されている。殉葬者が室内にいたとは考えにくい。

金釦綴貝腰帯（第3図A1～A3）の全長は約97、幅6cmで帯の両端に同じ紋様の黄金帯飾板（帯釦とよぶ）長13.3、幅6cmのものが、それぞれに一對連結していた。上のセットのものには金針1が、下のセットのものには銀針1が伴っており、それぞれ長約3.3cmを測る。黄金板の長幅はほぼ同じだが、厚みは差が大きく0.3と0.12cmという。重量は片方のセットが390と358g、もう片方のセットが280と275gである。帯釦面には浅浮彫の紋様があり、それぞれ右と左を向く横向きの馬に頸と尻に熊のような四足獣が咬みつく北方系青銅文化によくみうける動物咬闘紋を表現している。周縁にはくちばしの広い鳥首紋を配する。阿魯柴登発見の著名な匈奴金冠の頂上の立鳥と同類だという。枠はない。馬の顔の後、首の下に左右どちらの帯釦も孔をもつ。裏面には横むきに紐の通る釦が2つつく。裏面全体に粗い布の表面のような状態を呈することを高浜秀は指摘している。重量の軽い方の帯釦の裏面、それぞれの辺に沿って線刻の篆書があり、「一斤一両十八朱」と「一斤一両十四朱」と判読されている。

帯の部分の長さは約70、幅6cm。帯身の裏面に布紋状の碎片があり、絹織物を地とし上に寶貝三列を綴じつけ、寶貝の間には四朶の金花をまじえる。さらに帯釦と帯身の接続部分近くから数個のソロバン玉状の銀飾が出土しており、これも金釦腰帯を構成する一部かと考えられている。鄒厚本と韋正の両氏は帯飾板の裏面で布紋状の碎片を発見したので、帯の地は絹織物かと疑いながら記載している。発掘の簡報を担当した王愷・邱永生の両氏は絹織帯だとする。黄金帯飾板を鑄造する時、布で包んだというよりは布を台にしたというべきか蠟原型を用いる方法によるため、帯飾板の裏面に布目痕のついている資料がこれまでもいくつか知られており、獅子山の例も高浜

が指摘するように同じ技法によったものである。間に挟まった土などに帯飾板裏面の布目が転与され、それが布紋碎片と見誤られ、絹織帯身だとされたのではなかろうか。三列の寶貝、寶貝の数は報告にないが、金花、銀飾多数を綴じつけて絹織帯がもちこたえるか、革帯ではないかと思う。

獅子山楚王陵の主人 獅子山の崖洞墓の全長約117mにも及ぶ規模の大きさ、山麓の兵馬俑坑の存在、出土した官印のうち20余種も「楚」と頭につくことなどを考慮すると楚王陵の一つと考えるのが当然と思える。17万枚余出土した銅銭は秦半兩銭、漢榆莢半兩銭、漢八銖半兩銭、文帝初鑄の四銖半兩からなり、墓葬の上限は孝文五年（B.C.175）、五銖銭を1枚も含んでいないということで下限は武帝の元狩五年（B.C.118）より前ということになる。

西漢時代、漢初の功臣楚王韓信が除かれたあと徐州では十二代の楚王が封じられた。初代から八代までは劉邦の弟劉交の系譜で、九代～十二代は宣帝の血をひく。墓葬の推定期間内に治まる楚王は初代から五代まで、初代劉交および家族墓は楚王山漢墓群が比定されており、五代劉道は北洞山漢墓かとする見解がある。二代劉郢（劉郢客）は4年、四代劉礼は3年と治世年数が短かく、墓の規模の大きさにそぐわない。初代楚元王劉交は23年、三代楚王劉戊は21年と治世年数の長さとも墓葬規模はつりあいがとれている。最初に説明したように墓の工事は未完成のところがあり、なんらかの理由であただしく埋葬が行われたと思える。景帝三年（B.C.154）、呉楚七国乱が起り、首謀者の一人楚王劉戊は敗れ自殺に追いこまれた。墓の規模、未完成のところを残しながらの慌しい埋葬、かと思うと4000枚にも及ぶホータンの上質の玉を用いた金縷玉衣の出土などは、墓主が楚王劉戊（B.C.174～154）の可能性が高いことを示しているようだ。

金釧綴貝腰帯について、特に研究成果を発表した鄒厚本と韋正の両氏は、王国維の見解も参考にしながら、帯身に寶貝が三列とじつけられていた点を重視して、この北方系青銅器文化のモチーフをもつ黄金製帯釧こそが、黄金飾貝帯とよばれるべきものだという見解を実物に基づいて、はじめて明らかにした。また『漢書佞幸伝』にみられる「貝帯」を是とし、王国維が「胡服考」で主張した「黄金（飾）貝帯」、「貝帯」とする見解を否定し「黄金飾貝帯」「貝帯」を是とした。

獅子山楚王陵で発見された黄金飾貝帯は鄒氏らは篆書の刻銘などから漢の製品だと考えられている。またこの帯釧は黄金製であるが、同じ図柄の帯釧で鍍金製のものが陝西省西安三店村⁴（第3図B1・B2）から、さらに材質は不明だがウラル地方南部のポクロフカ⁵からも出土している。

これまで北方系帯釧について成果を公表してきた研究者は、エンマ・C・バンカー女史⁶をはじめ、中国では烏恩⁷、孫機⁸、田広金⁹・郭素新の各氏など代表的な人々があげられる。しかし当然のことながら帯釧そのものの研究が中心であって、その帯身に寶貝（中国では海貝もしくは貝と表記する）を伴っているかどうかなどには、目がむけられなかった。王国維の「胡服考」で議論した黄金飾貝帯か貝帯かという視点も、そういう状況にほとんどめぐまれなかったからだ

はいえ、きちんと検討してみようという姿勢を示された方は、知見の範囲ではおられない。

漢代の黄金飾貝帯ともいべきものの出現は、北方系帯釦の研究には少なくとも二つの視点、帯釦本身の研究と帯身に飾られた宝貝の有無について目をむける必要があることを示した。漢代の北方系帯釦の検討に先立って、まず春秋戦国時代の帯釦は具帯か貝帯とよばれるものが存在するのかといった点を明らかにしたい。

春秋戦国時代の貝帯とは

先にも引いたが『淮南子・主術訓』の高誘注に「趙武靈王は春秋の後に出で、大貝を以って帯を飾り胡服す」とある。大貝をもって帯を飾るとというのが、帯身に3列や2列に宝貝を並べてとじつけるというのでなければ、時代は下るが、吉林省扶餘県出土の元代の金釦玉帯¹⁰のように帯から大貝に相当するホンダカラガイ（虎斑海貝）を一個つりさげた例がある。匈奴を含む北方遊牧系の人達の墓葬から帯に綴じつけているかいないかは別にして、帯釦類とともに宝貝をどれだけ出土しているというのか調べてみる価値はある。古くは新石器時代の馬家窑文化や大甸子の夏家店下層文化のように宝貝は重要視されていた¹¹ので、中国北方の東西を問わず宝貝の愛好の風はあったのだ。それは中原文化に宝貝が現れるよりも早いことであつたかも知れぬぐらいである。帯釦や帯鉤（中国式の帯鉤をよぶ）に宝貝に由来する貝紋を鑄出したものがあるかということも含めて検討する。

北方系帯釦で宝貝をモチーフにしたものは2例、東京国立博物館所蔵の包頭収集品¹²（第2図A）がある。鳥形帯釦と呼ばれる類に属する。東博収蔵資料は鳥身を表す環状部分の内側の隅が少し角ばっているが円形で、環体の部分に宝貝に由来する貝紋の連なりを12個と14個つづけて一周する。内外の周縁に刻み目紋をめぐらすものとなないものとある。革帯の孔を受ける鳥首形の鉤は環体より前方にしっかり突出していて、この類のうちでは古いタイプである。平面全長5.9cm。

これと同様な貝紋と周縁の刻み目紋をもつ方策の類の鑄型が、山西省侯馬牛村の晋国最後の首都、新田の都の鑄造工房と判断される遺跡¹³から発見されている。方策の范（第2図B）とあるのがそれで、報告によると鳥形方策范は土製で左右2個の范で1個の片面の鑄型になる。鑄型面には分割范を組合せるためのほぞとほぞ穴状の用意がされている。鑄型の外面には合せ目が記されている。范長6.8、両片とも幅2.8厚さ2.7cm。方策本体の部分の首は鴨頭形で長3.7cm、身は横長の長方形環で長4.7、幅3.2cm、平面で測ると全長約5.9cmとなり先の東博収蔵資料と変わらない大きさとなる。ただ鳥の尾部はない。この点はオルドス各地で出土している帯釦が退化しても尾の形をとどめているのと異なる。環状部分に片側だけで15個の貝紋をめぐらせ内外周縁に刻み目紋帯を配する。

孫機¹⁴によると鳥形帯釦は帯鑄と呼ぶべきもので、匈奴や東胡の革帯を締めるものだ。尾部側

に一方の革帯を結び、鳥の頭の方から別の革帯を環身の下からくぐらせて、革帯にあけられた孔を鳥の首にはめこみ、余った部分をもとの革帯にまきつける方法をとる。このタイプの一番早いのは内モンゴル桃紅バラの春秋晩期の例かという。一方中原と南方出土にこの帯鐻に似た釦具がある。方策と称している報告もあるがこれは衣服を締めるものではなくて車馬器の類である。安徽舒城九里墩と湖南長沙瀏城橋などの春秋墓から出土している。匈奴・東胡の帯鐻と結び方が逆で、方策の鳥頭の方向と革帯の端末の方向は同じで、結び方は簡単だという。

侯馬の方策の時期は、半地下式工房から相伴した鼎・鐘・車書・鏡などの鑄型ともども報告のいう晩期Ⅴ段に属するという。工房内の鑄型はほとんど未使用だった。晩期Ⅴ段はB.C.450—415年の間に位置づけられている。戦国早期だという。

話が少し横道にそれるが侯馬の鑄造工房でみられる貝紋のある陶范（土製の鑄型）について少し触れておきたい。鑄型の種類は鼎范、方壺蓋范、舟范、銅犧立人擎盤范、車書范、車書模、鏡范、帯釦（方策）范に貝紋をもつものがある。時期は舟范の早期Ⅱ段から鼎、車書、鏡、帯釦范を含む晩期Ⅴ段に及ぶ。鑄型ではないが、骨製宝貝1個が中期Ⅲ段に比定され知られている。報告者は前期Ⅰ・Ⅱ段をB.C.600—530年、中期Ⅲ・Ⅳ段をB.C.530—450年、晩期Ⅴ・Ⅵ段をB.C.450—380年と年代づけている。侯馬新田の晋国の官営工房では、宝貝に由来する特徴のある貝紋が少なくともB.C.605年からB.C.415年頃まで使用され、青銅容器や武器、車馬具の類に用いられていた。その中に方策があり、春秋晩期あるいは戦国早期、晋国の北部や西部に遊弋する北狄や西戎の人々の鳥形帯釦のモチーフとして貝紋を使用するにいたる関係が生じたのではないかと考える。後に触れるが晩期Ⅴ段に比定されている貝紋をもつ車書も遊牧系の人々の墓葬から副葬品として発見されている例がある。春秋中期後半から戦国早期にかけて宝貝をモチーフにした貝紋をもつ各種の青銅器を鑄造したのは晋国が第一である。B.C.403年晋が三分され韓・魏・趙がそれぞれ自立するが、貝紋をもつものは戦国期の三晋の青銅器に基本的に限定し得ると判断する。ちなみに晋はB.C.376年に滅んだ。

なお貝紋をもつ方策そのものが、河南省陝県（現三門峽市）后川村M2040号墓¹⁵から3点（第2図C1・C2）出土している。鳥というより夔龍首だというのが、長方形の環の片面あるいは両面に貝紋と小点紋を飾り、侯馬の鑄型で製作されるものとよく似ている。M2040号墓はここで調査された東周墓葬105基の中で規模最大のものである。長方形竪穴土坑墓で1槨重棺からなる。宝貝に由来する貝紋としては他に小銅鈴が相伴しており、宝貝そのものも45枚が車馬器と同出している。戦国早期あるいはやや後かと比定されている。

同じ陝県の東周墓M2148号墓から鉤面に貝紋を飾った中国式帯鉤（第2図E）が出土している。鴨首形の鉤首で鉤尾に片寄った鈕の上のスプーンのようにふくらむ鉤面に貝紋が鑄出されている。他にも1例あるようだが同じ墓かどうか不明。戦国早期に比定されている。戦国期に相当する墓主は魏の人々であろうかという。

貝紋をもつ帯鉤のもう一つの例は、河南省洛陽市西工区C 1 M3943号墓¹⁶から出土した金帯鉤(第2図D 1・D 2)である。龍首形の鉤、扁平な如意形、鉤面を三条の帯状で区画し空間4か所に貝形銀飾を嵌めこむ、背面の鈕も銀製である。白玉「事君子」印を伴う。玉覆面する。墓主身近かには銅帯鉤2点があった。金製帯鉤は玉印・玉帯鉤を含む玉器類とともに棺内の足先に置かれていた。戦国晩期の六山字紋鏡を伴う。東周王城内の東北に位置し過去に附近から4基の甲字形積石・積炭墓を発見している。M 1号墓からは石圭に「天子」の墨書のあるものが発見され東周の天子墓かと推測されている。これらの墓から100m程の距離に位置することなどから副葬品の美事さとともに女性で大夫クラスの貴族墓かという。

中原で春秋・戦国時代に貝紋をもつ方策・帯鉤の類は調べた範囲では以上である。車馬具の類の方策は陝東周墓でみられるように宝貝と伴うことはあるが、これは殷や西周以来の馬と宝貝の関係の伝統を受けつぐものといえよう。中国式帯鉤の場合は、陝東M2148号墓は宝貝を伴わない。洛陽M3943号墓の場合も同じである。これらを貝帯とよんでいいものかどうかは、その例があまりに少なすぎて呼ぶのをためらう。

北方遊牧系文化の人達の墓葬から出土している帯鉤に貝帯と称するにたる宝貝を伴う事例があるか検討する。時代の先後の目安は烏恩の論¹⁷によった。なおこれまで発掘で出土した鳥形帯鉤にはいずれも貝紋はない。

匈奴族の場合

1 内蒙古伊克昭盟杭錦旗桃紅巴拉¹⁸

7基の長方形竪穴土坑墓が調査され、5基から鳥形帯鉤が出土している。青銅器に貝紋をもつものはなく、宝貝やその模倣品の出土もない。春秋晩期～戦国早期という。

2 内蒙古烏蘭察布盟涼城県崞県窑子墓¹⁹

31のうち25基が調査された。鳥形帯鉤が3種6点出土している。M12の腰部から虎羊紋銅飾牌(帯鉤) 1対が出土する。透彫で虎が角の長い羊をおさえこんでいる状況。長7.6、幅4.3cm。M12は春秋晩期～戦国早期に比定されている。貝紋をもつ青銅器はなく、宝貝もない。

3 内蒙古烏蘭察布盟涼城県永興毛慶溝²⁰

81基の墓と殉馬坑1基を調査した。そのうち79基のうち57基から腰帯に関係するものが出土しているが、鳥形帯鉤と動物紋長方形飾牌についてだけ触れる。鳥形帯鉤は11点出土し、M59号墓例では鉤部に革帯の一部が残っていて締め方がわかった。帯鉤も16点出土しているが、鳥形帯鉤とは一緒にでない。動物紋銅飾牌は9点(銅4・鉄5)出土しM 5号墓からは2点1対、長10.7、幅6.1cm、虎紋を表出する。M27号墓の1対の長方形鉄飾牌は背面に粗い麻布のあとがあるという。M59号墓とM 5号墓は春秋晩期、M27号墓は戦国晩期という。いずれの青銅器にも貝紋はない。戦国早期に比定されたM10号墓からだけ宝貝が4枚出土した。16歳前後の女性で、子供が腹中にいた。宝貝4枚は上肢右側と下肢の間にあった。子供の再生と関係があるのだろうか。それ

とも多孔銅飾からなる腰帯の飾りの一部を構成していたのか。毛慶溝では一期の狄人文化と二・三・四期の樓煩に関係があるといわれる文化にわけられるという。

4 内蒙古伊克昭盟准格爾旗西溝畔²¹

3基の墓葬が報告されている。M1とM2は東西に並び間は5mだが、M3は2kmほど離れている。長方形竪穴土坑墓で残りの良いM2からは金銀器がかなり発見された。注目すべきは男性の腰部左右から各1点発見された黄金製虎豕咬鬪紋飾牌（帯釦）（第2図F4～F6）である。イノシシと虎が互いの後腿に咬みついて争っている図柄で大きき図柄は同じ、周囲の枠は縄索紋をめぐらす。大小は一致、長13、幅10cm。一方には虎の前足の横に一孔をもつ。背面には縦と横方向の環鈕各一がある。粗い麻布の印痕が認められる。先に獅子山楚王陵出土の黄金飾貝帯のときにもあったが、この帯釦の裏面にみられる布目痕というのは、エンマ・C・バンカー女史が早くに指摘した黄金製帯釦の鑄造法によるものである。これらは蠟原型法で作られたが、原型をつくる際に土台に布ぎれを使った。蠟原型を鑄型用の土で包んで、蜜蠟を焼いて型ぬきをする時、その布も焼けてしまったかなくなった。lost-wax/lost-textileとバンカーさんのよぶ手法²²で、残った布目が黄金を流しこんだ時に現われる。一端に孔のある方の重さは292.5g、もう一方は330g。帯釦の裏面縁に沿って、前者は「一斤二両廿朱少半」と後者は「一斤五両四朱少半」及び「故寺豕虎三」と篆書で刻銘されていた。なお腰部両側には銀花片多数があったと報告されているが、獅子山楚王陵の例のように帯身に金花片がとじつけられていた例もあり、この場合も腰帯飾の可能性は高い。

頭の左側に銀虎頭十字形金具（第2図F1～F3）が7点あり裏面にそれぞれ「尊工二両二朱」「尊工二両十二朱」「尊工二両十二朱」「尊工二両廿一朱」「尊工二両五朱」「尊工二両十朱」「少府二両十四朱」と三晋の字体で刻してある。黄盛璋²³は黄金製帯釦は秦の、銀製虎頭十字形金具は趙の製作になるという。墓葬の年代について戦国前期²⁴とする考えと晩期とする両者がある。西溝畔M2号墓で出土したこの帯釦は王国維のいう黄金貝帯と呼ぶべきものであろうか。いずれからも貝紋をもつものや寶貝の出土はない。少くとも貝帯とはいえない。

5 内蒙古伊克昭盟杭錦旗阿魯柴登²⁵

2基の墓葬から金冠飾を含む貴重な金銀器を発見した。そのなかに虎牛咬鬪紋飾牌（第2図H1・H2）とよばれている黄金製帯釦4点がある。牛（バンカーはヤク²⁶）は中央にねそべり4頭の虎（孫機は狼²⁷）が牛の頸と腹にそれぞれ左右から咬みつき牛の角が左右の虎の耳をつらぬいている図柄で、各墓から同じ紋様のものが一対ずつ出土した。

腰に締めると牛の顔がそれぞれむきあう。左を向く牛の顔の上に1cm大の孔を穿けてある。図柄は孔でそこなわれている。四周に縄索紋を飾る。四隅に小孔を穿ける。裏面の両端近くにそれぞれ環鈕をもつ。孔には磨りへった痕がみえる。4点ともほぼ同じ大ききで長12.6、幅7.4、厚さ0.2cm、重さ220.6gを測る。裏面に布目痕があるかどうかの記述はない。貝紋をもつものはな

く、宝貝の出土もない。戦国晩期。バンカーによればB.C. 3世紀に年代づけ²⁸られている。阿魯柴登は先にのべた西溝畔の西へ100余km。西溝畔戦国墓は林胡に関係あるとすると阿魯柴登は林胡の一支の王あるいは酋長の位置を占めるような人物かという。王国維のいう黄金具帯に相当するものといえよう。

阿魯柴登の北方遊牧文化の黄金帯釦は、バンカー女史による²⁹と紀元前4世紀末～紀元前3世紀にオルドス地域にまったく新しい製品が登場する。黄金製品と銀装飾品、馬具のつめ金具の新しいタイプといった類で、この変化にアレキサンダー大王のアジア遠征（約B.C.334—323年）とB.C.307年の趙武靈王の胡服の採用がだいたい一致している。この時期にオルドスへ東部中央アジアから新しい人々の流入があったのではなかろうかという。その証拠が阿魯柴登で発見された金銀器だという見解である。

阿魯柴登の北方遊牧文化を代表する虎牛咬鬩紋帯釦は、バンカー女史のいわれる解釈で理解するとしても、同じく黄金具帯とよぶのにふさわしい西溝畔M2号墓出土の虎豕咬鬩紋帯釦の製作者とか製作地はどうであろうか。報告した田広金・郭素新の両氏や銘文の研究からその問題に迫った黄盛璋氏は、裏面に篆文で帯釦の重量の刻銘されていることを手がかりに、この黄金製帯釦を秦国官営工房の製品だと判断している。また同出した銀製虎頭十字形金具は同じく裏面に刻された銘文から三晋のうちの趙国の少府の管轄下にある専工の製品だと黄盛璋氏はいわれる。問題は春秋戦国時代の北方系青銅器文化の製品のなかには、文化の担い手である遊牧系の人々の製作になるものだけではなくて、それに似せて中国の官営工房で製作したものも含まれていると考えられることである。なかには遊牧系の人々の中へ漢人がなんらかの形で入りこみ、ものを作ったり、文字を刻することもあっただろうから、銘があるからといっていちがいに漢人文化の所産ときめつけるのはよくないといった見解も聞かれはする。そういった考え方に対し参考になる資料が近年発見された。

西安北郊の北康村で建設工事中、地下式洞室墓³⁰を発見した。竪穴の墓道で一方に横方向に洞室を設け木棺を置いたものである。顔を南にむけ頭を西にした屈肢葬で、頭の北側壁に龕をつくり土器を副葬する。成年男性で副葬品の過半がオルドス式青銅文化の風格をもつ陶模具（土製鋳型の原型）であった。さらに鋳型の原型をつくるのに必要な鉄製工具（はさみ・のみ・刀子）や礪石があった。腰近くから馬紋飾牌模が1点出土していて、オルドス系モチーフの帯釦の一つを製作鋳造していたことが判明した。馬紋帯釦の原型（第2図I）は1点、長方形で台座の長は9.4、幅7、厚さ2～2.5cmを測る。上下と左の中ほどに長方形の小さな凹み溝がある。背面には薄く一層スサまじりの土を塗っている。帯釦本体の部分の長7.8、幅5.6cm。泥質紅陶で表面は青灰色。浅浮彫で一頭の奔騰する駿馬を表現、前肢は内にかかえこみ、後肢は上に翻転してたてがみに接している。上段に5個連なる鳥頭の装飾を配する。周囲の框は麦穂紋と呼ばれる繩索文の対向するものを使う。同じといってよいと思える銅帯釦（第2図J）がシベリアから発見された

コレクション（田広金ら『鄂爾多斯式青銅器』図五二、3）の中にある。ただしこちらには框の麦穂紋はない。


墓葬からは橋形鈕で「蒼」銘銅印が頭の上方にあった。墓の形や屈肢葬といった葬式などからみて戦国晩期の漢中の秦墓だという。宝貝は伴っていない。貝紋もない。秦人の工匠が戦国晩期にオルドス式帯釦を含む北方系青銅器を西安近郊で鑄造していたことが判明した。西溝畔の黄金虎豕咬鬪紋帯釦の製作地を秦国とし、製作者をのちの秦国の寺工の前身（銘に「故寺豕虎三」とあること）とする裏づけにならないだろうか。

春秋中晩期、晋北丘陵地区で活動していた少数部族は北狄と総称されている。³¹ 北狄には白狄と赤狄がある。中山は白狄であったといわれている。春秋末より戦国に入ると北狄はしだいに林胡・樓煩とよばれるようになる。趙武靈王は二十年（B.C.306）中山地を略し、寧葭に至る。西は胡地を略し榆中に至る。林胡王、馬を献ず。惠文王二年（B.C.297）主父（武靈王）は遂に代に出て西は樓煩王と西河に遇う…。西河とは南流する黄河の東岸の晋北地区を指すという。当時黄河の南流する以西に遊牧していたのは陝北とオルドス地区の部族で北狄中の林胡の一支、黄河東岸の晋北と蛮汗山地区の部族は北狄の樓煩の一支であった可能性が高い。前者に相当するのが桃紅巴拉を代表とする文化、後者の代表が崞県窑子と毛慶溝の文化だと。趙国は陰山山脈に沿ってその山麓に長城を修築した。現在の巴盟一帯には九原郡が設けられたが、現在の伊克昭盟一帯は完全に占有されていなかった。秦始皇帝の時、蒙恬が兵を出しこのあたり一帯を「河南地」として取りこんだことはあった。戦国期より漢武帝の段階まで、秦始皇の時のごく短い間を除いてこの附近は匈奴族の占有するところであったという。

西戎の場合

内蒙古のオルドス地帯を中心とする北方青銅器文化の帯釦については概略をみた。さらに西南方の寧夏一帯の状況を少し見ておく。

1 寧夏固原楊郎³²

東周時期の墓葬49基を調査した。豎穴土坑墓と地下式洞室墓（豎穴墓道土洞墓）である。鳥形帯釦6点（I M 8から2点、I M 3、II M 14）、透彫動物形銅帯釦2点（III M 4）1対などが目立つ。また貝紋をもつ車書2点（I M 11から）も見られる。I M 3、I M 8は春秋晩期から戦国早期に、II M 14、III M 4は戦国晩期に年代づけられている。車書の出土した墓葬は盗掘されていたが、車書は紋様から戦国早期としてよいのではなかろうか。北方系青銅器文化に起源はもつが土着の色の濃い戎人文化だという。なお1976年豎穴土坑墓から字形の銅製帯釦1対が出土している。虎噬驢紋銅帯釦で、長13.7、幅8.2、厚さ1～3 cm、片方の前方には鈎があり孫機のいう帯鐻である。

2 寧夏彭堡于家庄³³

28基の墓葬を調査した。豎穴土坑墓と洞室墓にわけられる。鳥形帯釦14点出土しているが貝紋

をもつものはない。宝貝もない。春秋晩期から戦国早期という。春秋期の西戎八国と密接な関係をもっていた文化かと。

3 寧夏固原県三營公社紅庄³⁴

先に触れた陝西西安北康村の戦国晩期の秦国の鑄銅工匠と思える人物の墓葬に副葬されていた馬紋銅帶釦の土製原型と非常によく似た紋様の黄金製馬紋帶釦（第2図K）が出土した。右向きの奔馬が一頭、前脚をくの字に折りまげ、後肢は反転してはねあげる。馬の顔の前から馬の上方にのびるねじれたつる状の先に羊とも鳥とも見方によってみえる紋様5個を飾り、四周の框は麦穂紋をめぐらす。図柄内の左端中央に小孔を1個開けている。馬の向きは左右逆だが北康村の鑄型の原型と同じモチーフである。北康村の原型は銅製品だけではなく、黄金製品の鑄型としても用いられたものであろうか。大きさ、重量その他の記述は全くない。

4 寧夏彭陽県張街村春秋戦国墓³⁵

6基調査されたうちM2号凸字形土洞墓から虎形銅帶釦が2点出土した。1点は左むきの虎で裏面に単鈕を備え虎の吻にあたる裏側には釦針がある。長6.8、幅4.2cm。もう1点は右向きの虎が足でおさえつけた鹿を食べようとしている。長7.5、幅4.7cm。他に葬坑とされ牛・馬・羊などの骨はでていないが人骨はないとされた遺構から鳥形帶釦が1点出土している。

寧夏南部地域は春秋戦国時に西戎とよばれた人々の活動地域だった。顧頡剛によれば西戎八国の活動地域は現在の甘肅隴東諸地と陝西、寧夏だという。綿諸、緄戎、翟、獯、義渠、大荔、烏氏、胸衍を西戎八国という。固原地区一帯に活動していたのは主として義渠戎と烏氏戎だという。秦恵文王（B.C.337～B.C.310年）は烏氏戎を征服し烏氏県を現在の固原県東南部に置いた。どこからも宝貝を伴う例はない。

寧夏の戦国晩期の黄金帶釦はおそらく西安近辺に設けられていた秦国官営工房で作られた可能性の高いことが判明した。また鳥形帶釦や動物紋帶釦が寧夏各地の西戎の人々の墓葬かと推定されるところから出土していることはオルドス平原・高原の北狄（林胡・樓煩）の人々と共通する。そこでは秦や趙の製作した黄金帶釦や銀十字形金具が認められたことは先述したとおりである。オルドスと寧夏の遊牧系文化のちがいは、前者にごく1例宝貝の出土例を認めるが、後者にはないことである。

山戎や東胡族の場合

オルドスの東方、燕山山脈の南北やシラムレン河上流一帯の遊牧系文化の中で春秋・戦国時代、帶釦や宝貝はどのようなものがあり、どのような扱いを受けているか次にそれを少し検討してみたい。燕山南北の山戎文化³⁶の墓葬とそこから出土する宝貝の状況をみる。

1 河北省平泉県東南溝黄窩子山M10号墓³⁷

西周晩期から春秋早期の墓から宝貝10個が出土している。

2 北京市延慶県靳家堡郷玉皇廟³⁸

350基の長方形竪穴土坑墓を調査した。M2号墓からは鼎や罍などの青銅礼器とともに包金銅貝10個が出土している。M13号墓からは鳥形帯釦が出土している。顔が環身より前方にある古いタイプである。M120号墓は6歳ごろの子供だが頸部に宝貝1個がみられ胸のメノウと首飾りだったかという。時期は春秋初期から春秋と戦国の際という。

3 北京市延慶県龍慶峡別墅区³⁹

12基調査したうちM30号墓は中型墓で盗掘されていたが金貝24個、宝貝495個、緑松石貝52個が鼎、直刃七首式銅劍柄などと残っていた。春秋晩期という。宝貝などの出土状況はわからない。

4 河北省宣化県小白陽⁴⁰

48基の長方形竪穴土坑墓を調査し、M13号墓から宝貝4個、M43号墓から宝貝1個が出土したというが記述はない。動物形牌飾というのものもあるが詳細は不明。春秋中期～晩期。

5 河北省灤平県虎什哈炮台山⁴¹

35基の春秋晩期～戦国初期の墓葬を調査しM28号墓の北側にある2基の墓からは副葬品がまじっているが、長胡三穿銅戈2点と一緒に貝紋銅鈴2個が出土している。

6 河北省懷来県北辛堡⁴²

戦国早期の墓葬4基のうちM1号墓からは、宝貝138枚が出土している。青銅容器・銅戈などを含む首長クラスの人物の墓だという。

7 遼寧省凌源県五道河子⁴³

戦国中・晩期の11基の墓葬のうちM1号墓から、金製牛牌飾（長5、幅2.3cm）1点とともに貝紋のある銅箍1点が出土している。銅戈の柄に嵌めこんだものかという。

靳楓毅らによると以上の遺跡は、直刃七首式銅劍を指標とする山戎文化に属するという。報告がいずれも簡略なものが多く詳細がよくわからない。しかし帯釦の類、とくに黄金製の帯釦の類はみあたらない。一方宝貝の実物を含めて、それに由来する金貝、包金銅貝、緑松石貝などをかなり見ることは、内蒙古や寧夏の状況とはおおきくことなるといえる。しかしこれらの宝貝が貝帯といえるようなものを構成していたかという、出土状況が十分明らかでなく判断はむづかしいが否定的である。

東胡に比定すべきかどうかは別にしても、夏家店上層文化に属する墓葬から1か所だけ宝貝の出土を確認した。

1 遼寧省昭烏達盟寧城県南山根⁴⁴

夏家店上層文化に属する墓葬が9基調査された。すべて長方形竪穴土坑墓である。M3号墓は石槨と木葬具を備え、仰身直肢葬の成年女性、腰部附近から穿孔された宝貝100個が発見された。94個の宝貝は胸前で長い輪状を呈すると報告ではいう。馬に乗った2人の人物が兎を追う像を環外に鑄出したものを帯飾とする見解もある。宝貝が鈴形銅飾9個や銅環と組合さって帯飾を構成する可能性はあると思うがどうであろうか。

M10号墓は石棺墓で老年男性が側身直肢葬されている。宝貝4個は頭の耳の近くで出土、耳墜飾かという。いずれも春秋期の事例といえる。

以上、山戎と東胡といわれる夏家店上層文化のそれぞれ帯釦、宝貝とのかかわりに重点をおいて概観した。この地域でも春秋・戦国期に貝帯といえる確実な例はないようだ。黄金製帯釦といったものも遼寧凌源五道河子の金牛牌飾が帯飾の一部かなと思えるくらいで確実にこれだといえる内蒙古や寧夏のような例はない。考古遺物・遺跡から復原できる文化をすぐ古典の民族と結びつけるやり方には問題があるとは思いますが、西戎、北狄（匈奴の先）と山戎や東胡の人々の文化⁴⁶の相互の違い、春秋戦国時の諸国とのつきあい方の違いが見えてくる。一方、寧夏や内蒙古とちがって、燕山周辺やそれより以東シラムレン河上流にはかなりの量の宝貝の流入が認められる。この相違もなにに由来するのか、興味深いところである。いずれにしても春秋戦国時、塞外の人々の世界で使用された帯釦に黄金飾貝帯と呼ぶものは、西は寧夏から東は遼西までオルドス地域を含めてもない。地域と時期によっては宝貝あるいはそれに由来する金貝、包金銅貝、緑松石貝なども認められるが、それが帯飾として使用されたかどうかは、これまでの調査例ではよくわからない。宝貝に由来する貝紋をつけた鳥形帯釦、車書、銅箍など各種の青銅器も出土しているが、春秋時期の晋国や戦国時期の三晋（趙・魏・韓）や燕の製品が主で、東京国立博物館蔵の貝紋をもつ鳥形帯釦が同じく貝紋をもつ銅環とともに北方青銅器文化の所産かと考えられるくらいである。いずれにしろ貝紋そのものは晋や三晋に愛好されたもので、北方系青銅器文化の所産ではなく、これらから貝帯というものを想定するのは無理だろう。

黄金帯釦そのものは、バンカー女史のいわれるようにアレキサンダー大王の東征と深い関係があり、それがまた趙武靈王の胡服騎射を決断させる要因の一つとなっているとしたなら、黄金帯釦は胡服の重要な要素であったといえよう。そのなかにも趙国や秦国では、北方系青銅器文化人の愛好する黄金帯釦を、彼等の好む動物紋や動物闘争紋のモチーフをとりこんで、趙国少府専工、秦国寺工などの官営工房で製作し、林胡・樓煩や西戎の胡と当時彼等が認識していた北方草原地帯の遊牧系の人々の首長クラスの人に贈る風習があった。また青銅帯釦もつくり、銀製十字形金具なども遊牧系の人々の好みのもをつくり、交易に使う、あるいは彼等自身も使うことがあった。秦始皇廿一年（B.C.226）の銘をもつ銅羊頭車書⁴⁶（第2図L1・L2）などもその一環で理解し得よう。

注目すべきは河北省易県辛庄頭M30号墓⁴⁷出土の金製帯釦（第2図G3・G4）や金製人頭像金具（第2図G1）、銀製羊紋金具（第2図G2）などの北方系青銅器文化のモチーフをもつものである。黄金帯釦は同じモチーフのものサイズのセットが各1対あり、長軸にそって対称に転開する紋様は阿魯柴登出土の黄金帯釦と同じ趣をもっている。帯釦裏面には布目痕をとどめており、バンカー女史のいうlost wax/lost textile法によって鑄造されたものであろう。裏面の革帯を通す環鈕のむきは一方が長軸に並行、一方は長軸に直行の位置につけられており西溝畔M2

号墓出土例と共通する。黄金帯釦の製作技法の西溝畔M2号墓出土例と共通することから、秦での製作の可能性を考えさせ、裏面に刻銘をもつ人頭像や各種の動物紋飾件は、その刻銘が燕の衡制を示しているとする石永士の見解と趙の衡制を示すとする黄盛璋の見解にわかれてはいるが、中原の所産とする考えは同じといえる。春秋戦国時代、燕の長城の北は山戎、東胡の遊牧系の人々の占有するところであった。彼等を経由して燕人が黄金帯釦や金製・銀製動物紋飾件を入手することもあったとは思えるが、秦や趙から燕人が入手することもあり得たかと西溝畔M2号墓例と辛庄頭M30号墓例とを重ね合わせてみる時考えられよう。

燕下都の報告は辛庄頭M30号墓の被葬者について下都の城内に作られた大型墓であることのほか多くを語らない。被葬者は誰と特定できる根拠はないが、北方系青銅器文化の所産たる金銀製品の類似から西溝畔2号墓との同時期が伺え、それは戦国晩期、紀元前3世紀の前半の一点を示している。趙の武靈王以后、燕では子噲と子之の混乱により斉に敗れて一時の衰退から昭王による燕の再興以後の時点ではないか。

『史記』卷三十四「燕召公世家」によれば、燕昭王二十八年(B.C.284)、国力を回復した昭王は魏の人楽毅を上將軍とし、秦・楚・三晋と謀ってついに宿敵斉を伐った。斉は敗れ湣王は莒に逃れた。燕兵は単独で北に追い臨淄に至りことごとく斉の宝を奪い、その宮室・宗廟を焼いた。斉城で下らなかつたのは聊・莒・即墨の3か所で他はみな燕の支配下に入った。それが6年続いたとある。離合常態の戦国時代ではよほどのことがないと歴史的事象と考古遺物を結びつけるのは困難ではあるが、燕と三晋・秦の3者の接点の時期というところとそう多くはないのではないか。辛庄頭M30号墓の被葬者をこの昭王二十八年の対斉戦役の前後にそれにかかわった上位身分の人物の墓かと推定する一つの目安と考えておきたい。

製作地が北方系か中国かは別にしても春秋戦国時に黄金具帯あるいは黄金飾具帯とよびうるものはあっても、黄金飾具帯あるいは具帯とよびうるものは、考古遺物からは見あたらないようだ。

漢代の黄金（鍍金・銅）飾具帯

話を最初の西漢楚王劉戊墓と推定される獅子山漢墓から発見された黄金飾具帯にもどそう。先にも触れたが、同じ図柄の帯釦が2例西安東郊の三店村の西漢墓とウラル南部のポクロフカで知られている。

三店村西漢「王許」墓 西安東郊の白鹿原の西南端台地上で発見された。地表から墓室までは約10mの深さの竪穴土坑墓、平面正方形で一辺7.6mを測る。棺槨の四周と上部は60～70cmの木炭層で包まれており、炭層の間には黄土が挟まれ築き固められている。墓室の東西に副葬品は置かれていたが、墓室はつぶれていて棺槨の規模や副葬品の原位置は不明である。

青銅器のなかに一組の西周晩期の録盃4点があり、寿県蔡侯墓出土品に似た春秋晩期～戦国初

期の蟠螭紋銅鐘1点がみられる。殷周時代の貝幣である寶貝1個も含めて骨董趣味のはしりのように報告ではいう。

一対出土している鍍金銅帶釦（第3図B1・B2）は、長11.2、幅5、厚さ0.3cmの同じ大きさで、獅子山楚王陵出土のものに比べて少し小さいが紋様はほとんど同じものである。写真⁴⁸によると左向きの馬の顔の後、首の下に円孔を開けるものが1点ある。裏面には縦方向に環鈕を2個もっている。同出の半兩2枚は径5cm、重さ80gもある漢武帝時の四銖半兩の25倍の重さがある特異なもので副葬用と判断される。1枚でている五銖銭は宣帝・昭帝の時期ではないかという。「王許」銘龜鈕銀印から墓主は「王許」、宣帝・昭帝以後あまり遅れない頃に埋葬されたと推定される。

報告書は殷周時代の貝幣だとしたが、寶貝は鍍金銅帶釦と組合さって貝帯を構成していた可能性があると考えられる。三店村一帯は西漢代司隸部京兆尹に属する。

徐州西漢宛胸侯劉執墓⁴⁹（第1図B1～B3） 江蘇省徐州市北5km、簸箕山頂で発見された豎穴石坑木槨墓で、墓口3.6×2.6、深さ8.1mを測る。一槨一棺、頭を南西にむける。着装した状態で腰部に黄金帶釦2点1対と、周囲に寶貝30余個が散乱していた。帯釦と同じく腰部の装飾であろうと適切に報告している。近くにあった金印は腰からつるしていたものであろうか。龜鈕金印は通高2.1、辺長2.3cm、重さ127g、篆書で「宛胸侯執」とある。

黄金帶釦（第3図C1～C5）は2個1対の帯釦と1個の金針からなる。長方形、裏面四周は少し高くなり横むきに上下に4個の鼻形鈕がつく。この鈕のつき方はこれまでの縦むきに2個つくと異なる。帯釦の図柄は口を大きく開いた熊か虎か狼のような獣で、身体は同じむきに2頭の丸くなった羊からなる。獣の上段には獣や羊とは反対むきに鳥紋を表出する。四周の框は麦穂紋。着装した時、獣の顔がむきあう形をとる。左腰にくる方の獣の顔の前に孔が開けられている。長9.1、幅5cm。金針の長3.85cm、舌形で中央で少しすぼまり後端に一孔をもつ。帯釦と舌の総重量309g。

獅子山楚王陵出土品と同タイプの黄金飾貝帯が「宛胸侯執」とある人物の腰帯として使用されている状態で明らかにされたことは重要である。なお周框の麦穂紋はないが、ほぼ似た銅製帯釦（第3図D1・D2）がスウェーデン極東古物博物館蔵として『内蒙古・長城地帯』に載せられている。

エンマ・バンカーによれば⁵⁰遼寧省西豊県西岔溝から出土した一群の帯釦のなかに同じく周框の麦穂紋を欠くが同じ図柄の鍍金銅帶釦が出土しているとのことである。バンカー女史は紀元前2世紀に年代づけている。同じ図柄でも西岔溝や極東古物博物館のものは遊牧系の北方文化の所産で、その図柄をほとんどそのままとり入れ、周框に麦穂紋をつけ加えて黄金製にし、帯身に寶貝を2列もしくは3列に綴じつけるといった貝帯にしたのは漢室であったということになるだろうか。

金印の銘より墓主は西漢楚元王劉交の子、宛胸侯劉執であることがわかる。紀元前201年、異姓諸侯王の一人韓信を除いたのち、異母弟劉交を楚王に封じた。文帝の時、元王を尊んで子が生

れるや爵を皇子に比したという。劉交の死去後、庶子の上邳侯郢（客）に楚王の位を継がせたが、文帝の前元五年（B.C.175）に郢（客）は卒した。子の戊が楚王位に即いた。景帝が位を継いだ後、「子の礼を平陸侯、富を休侯、歳を猶侯、執を宛胸侯、調を棘楽侯とした（『漢書・楚元王伝』）と劉交の王に封じられたのを根拠として息子達を侯に封じた。封地の宛胸は現在の山東省菏泽西南だという。

景帝三年（B.C.154）呉王濞と楚王戊は趙と通じ呉楚七国の叛乱を起した。3か月で敗れ呉王濞は殺され、楚王劉戊は自殺した。劉戊の叔父の劉執も反乱に加担したが、誅殺されたという記録と赦されたという記録がともに残っている。墓は北壁に横穴を掘ろうとして放置した形跡がある。函から墓主は30才位といわれる。もし劉執なら景帝三年からあまり遠くない頃に死去した、自殺か誅殺されたかの可能性が大かという。

獅子山楚王陵出土の黄金飾貝帯は楚中尉の献上品かとする見方が報告者よりだされているが、宛胸侯劉執の着装状況からみて楚中尉は楚王の物品の管理者だと考えられる。

四川省重慶市巫山県巫峡鎮秀峰村M3号（「臣后」）墓⁵¹（第1図D1～D4） 長江北岸、大寧河西岸の海拔120～250mの山の傾斜面で三峡ダムによる水没の可能性のある遺跡の事前調査を実施、3基の西漢の土坑墓が発見された。M3号墓から鍍金飾貝帯が出土した。墓道をもつ甲字形竪穴土坑墓で封土の残高1.3m、墓口長6.7、幅4、深さ5.25m、底の長3.7、幅2.52m、高さ約0.8mの二層台がめぐる。盗掘されていたが銅剣のほか漆盒の中に納れられて銅印章・帯鉤・鏡・鉄削・鉄簪などとともに鍍金銅釦綴貝腰帯があった。

帯釦（第4図A1・A2）の図柄は浅浮彫の虎が大きな角をもつ羊に喰いつく様子を表現している。四周は麦穂紋というか繩索紋というかで飾る。片方の長は10.7、幅5.2、厚さ0.5cm、もう片方の長は10.75、幅5.2、厚さ0.5cm。羊の顔が左を向く方の羊の顔の前反転した虎の尻の上に穿孔1をする。伴った貝帯は66個の寶貝からなり2列横に並んで綴じつけられている。長は約2.4、幅2cm、キイロダカラガイの類であろうか。帯釦の背面に附着している絹織物の現象から判断して、寶貝はもと絹織帯の上に綴じつけられていたものかという。鑄造時のものかこれだけでは判断できない。出土時、寶貝の上には朱と緑の色が残っていたとある。

銅印は方形双面文字印で、小篆で「臣后」、片面には漢隸の筆画が残るという。

後にも説明するが同じ図柄⁵²の鍍金帯釦や銅帯釦がこれで8例目となる。分布も四川・寧夏・広州・（広西）と広範囲に及んでいる。黄展岳によれば広西のものは疑わしいというので第1表からはぶいた。ただ帯身に寶貝を綴じつけた貝帯を伴った確実な例はこのタイプの帯釦では今回がはじめてで貴重な事例である。共伴している銅鏡は三弦鈕で渦紋地に四蟠螭菱紋鏡とも呼んだら良い戦国から西漢初期のものである。巫山は西漢代荊州刺史部南郡に属する。在地の有力者で郡の役人にとりたてられたものか、あるいは駐屯する軍の隊長クラスであろうか。

西漢景帝陽陵南区従葬坑の陶俑武人⁵³（第1図C） 陽陵は漢景帝劉啓（B.C.188～B.C.141）

と王皇后（?～B.C.126）合葬の陵園で、陝西省咸陽市渭城区の黄土塬上にある。咸陽原上には九代の西漢皇帝陵があるが最東に位置する。従葬坑は王皇后陵の正南300mのところ、東西320、南北300mの範囲に発見された。そのうち発掘されたのは16・17と20～23号の6坑である。多数の陶俑や木馬・木車の類が発見され、17号坑の陶俑が裸体で写實的に作られその上に着衣させる風に注目された。

第20坑の南区陶俑群は363体で別に木俑21体を数える。なかに写真からみて1体、腰に銅帶鉤貝帯をまきつけた武人俑が見てとれる。カラー写真以外に一对の銅帶鉤と思えるものを含めてこの俑についての特別な記述は何もない。非常に小さな貝殻を連ねて二列にした戦袍帯もあるといった程度の記載である。1994年商代宝貝の研究を発表した⁵⁴が、殷墟の奠基坑の中には、上半身もしくは下半身に宝貝を綴じつけた衣服を纏っていたと思える兵士が、戈をもって埋められている例がある。その時はこのカラー写真をみて、殷の風習の名残りが、西漢時代の軍団の指揮をとるような立場の人物に受け継がれているのではないかと考え、漢代まで中国における宝貝にまつわる風習を書き終る時には、この俑の記述で締めくくりにしようと考えていた。今この武士俑の腰にまきつけられた宝貝の意味をあらためて知ることになって嬉しく思う。

景帝陵の南に従葬坑はない。景帝陵は東向きで、従葬坑は東司馬道の両側に位置し、そのあり様は始皇陵の様子を受けつぐものである。陶俑のもつ冥銭はすべて半両で武帝時の三銖銭や輪廓をもつ半両銭さらには五銖銭などまったくない。明器に記された「元年」は景帝即位時の前元元年をさすなどの理由で、従葬坑の年代は生前から12年（B.C.153—B.C.141）かけて陵を造った景帝年中のものであり武帝期に降るものではないという。

獅子山楚王陵と徐州宛胸侯執墓がともに景帝三年（B.C.154）呉楚七国の乱を越した楚王劉戊とその叔父劉執の墓だとすると、そこから出土した黄金飾貝帯は、景帝の陽陵の従葬坑から出土した陶武人俑が腰にまく銅飾貝帯と年代的にぴったり一致する。そして『漢書・匈奴伝』文帝前元六年（B.C.174）に匈奴に衣類などとともに「黄金飭（飾）貝帯一、黄金犀毗一…」を贈ったとある。『史記・匈奴伝』にも「黄金飾貝帯一、黄金胥紕一…」とある。「佞幸伝」には貝帯とあった。少くとも西漢代惠帝・文帝・景帝の時代には黄金（鍍金・銅）飾貝帯が漢王室を中心に製作され、使用されていたと考えてよいと思える。西漢代の貝帯・貝帯は後に検討するとして漢代の匈奴の遺跡に見られる帯鉤や宝貝の状況はどうか。少し資料を検討してみたい。

1 内蒙古伊克昭盟准格爾旗西溝畔⁵⁵

9基の漢代匈奴墓を調査した。西漢初期か少し遅れる時期という。長方形竪穴土坑墓、M4号墓から腰部左右に包金臥羊飾牌2点と包金帶具2点のセットと思えるものが出土した。いずれも内に鉄心や鉄環を包んでいる。前者の長11.7、幅7、高さ6cm、後者は長9.5、幅5.3cm。宝貝の出土はない。ただ頭上の装身具の中には貝の殻を金で包んで飾りにしているものが6点あるが、宝貝ではない。

2 内蒙古伊克昭盟東勝県補洞溝⁵⁶

東漢早期の9基の竪穴土坑墓を調査。鉄製帯卡や鉄製腰帶飾を伴う。宝貝の出土はない。

3 内蒙古赤峰市翁牛特旗⁵⁷

鷹虎奪羊銅帶釦2点1対(第4図O)は巴嘎他拉蘇木三爺府嘎查の遊牧民が寄贈したもの。秦～西漢初期の陝西省銅川県棗廟M25墓出土品(『考古与文物』1986-2)と同じモチーフ。『内蒙古・長城地帯』第七十四図・5、スウェーデン極東古物博物館蔵品も同じ手のものである。羊の頸に咬みつく虎に、羽を広げて上から襲いかかる鷹を浮彫り風に表現する。長11.45、幅7.2cm。

武士駆車銅帶釦2点1対(第4図N)は解放營子郷泡子村出土、長11.9、幅6、厚さ0.25cm。車の前に弁髪を垂らした武士、二頭だての馬車の中には車廂内に向いあう二人の人物、御者はうつむきかげんに手綱をとる。向って右向き、腰の左側にくる方の框の中程に帯を留める鈎がついている。

双龍虬結銅帶釦1点は頭牌子郷敖包山上より出土した。長12.1、幅5.7、厚さ0.24cm。

いずれも宝貝を伴うかどうかは不明。

4 陝西省長安県澧西客省庄M140号墓⁵⁸

長方形竪穴土坑墓から長方形透彫銅帶釦1対(第4図P)が出土した。木の下に鞍・轡をもつ馬をそれぞれ従えた長髪の男2人が中央で相撲をとる。頭上に翼を広げた鳥がいる。片方は鈎と孔を備えている。長13.8、幅7.1cm。西漢前期。宝貝の出土はない。先に触れた銅川県棗廟M25号墓も宝貝を伴わない。

5 寧夏同心県李家套子⁵⁹

5基の墓が用水工事で破壊されたのを調査した。竪穴土坑木槨墓と磚室墓、石槨墓各1という。どこからでたのかわからないが透彫銅帶釦1点、2頭の羊が顔を外にむけている図柄、長11.2、幅6.3cmがある。竪穴土坑木槨墓(M1)と磚室墓(M2)から宝貝77個が出土している。東漢早期

6 寧夏同心県倒墩子匈奴墓⁶⁰

1985年に27基の土坑墓が調査された。多数の鍍金や銅帶釦が出土し、宝貝も検出されていて注目に値する。少しくわしく見てみたい。長方形竪穴土坑墓と偏洞室墓に区分されている。

長方形竪穴土坑墓

M1号墓 腰の両側に馬蹄形と長方形透彫の銅帶釦が各1件ずつあった。右側の2つの帯釦は背面と両者の間に革帯が残っていた。透彫双龍紋、片方は透彫で2頭のラクダの佇立するさま。馬蹄形のは牛頭・龍頭を配する。女性。宝貝は伴わない。

M2号墓 顔に宝貝1個。中央に留針をもつ帯釦、五銖銭、50才ぐらいの男性。

M4号墓 両眼と口中に宝貝各1個。両足先に長方形1対の銅帶釦。宝貝13個が手先、両肢の間から出土、五銖銭を伴う。40代の女性。長方形帯釦は中央が一段凹んだ溝状になりその両外側

に甲をかぶり剣をもった武士がいる。

M14号墓 鼻孔内に寶貝各1、両膝近くに長方形銅帶釦3枚、五銖錢出土、50才位の女性。左膝の外のは報告では浮彫伏臥状綿羊図案とあるが、出土例の一番多い虎噬羊図案（第4図B）というべきもの。先の重慶巫峽の鍍金製品と同じ図柄である。長9.6、幅4.5cm。一孔が右向きの羊頭の前にあく。重慶のと孔の開ける位置が異なる。他の2個は1対の鍍金透彫亀龍闘争図案（第4図E）のもの。周框に麦穂紋を飾る。後で触れるように広東の南越王墓より出土しているのと同じ図柄である。長9、幅5cm。

M16号墓 8～9才の子供で寶貝5個と五銖錢1枚。

M19号墓 額上に寶貝1個、右腰に長方形銅帶釦1対と寶貝40個、右足先に長方形銅帶釦1と寶貝1、右ひじに寶貝2、五銖錢出土。一対のは鍍金二馬交纏紋（第3図E1・E2）ともいべき図柄。周囲に麦穂紋。広西平樂銀山嶺⁶¹（第3図F）や朝鮮平壤梧野里古墳⁶²（第3図G）などから同じ図柄のものが出土している。足先のは透彫で羚羊が互いに外をむきあう。框に麦穂紋。鍍金二馬交纏紋銅帶釦1対と寶貝40個は一緒になって（鍍）金飾貝帯を構成していた可能性がきわめて高いと考える。40才位の男性。

偏洞室墓 豎穴墓道の底から横に一段さがった洞室を掘りこみ、墓道との間は木板で閉ざし室内に木棺を置くタイプをいう。

M6号墓 50才前後の女性、五銖錢、寶貝26個、透彫双馬互闘紋の銅帶釦。寶貝と銅帶釦は右足先に置かれ貝帯の可能性はある。

M7号墓 17才前後の男性。頸部に寶貝1、腰の下に寶貝10個と五銖錢2枚。鉄帶釦あり。

M10号墓 成年女性、頸部に珠と1個の寶貝。右手に五銖錢。骨盤下に寶貝39個、股骨の近くで9個の寶貝、3個1組で梅花状を呈する。☐字形を呈する銅帶釦の一方は馬が足を折りまげて右横をむく図柄、もう一方は中央の騎馬武者が犬に咬みつかれた人物の髪をつかむ。武者の左には馬車が樹木の下にとまり馬車の屋根の上に犬がとび乗っている（第4図K2）。遼寧省西豊県西岔溝匈奴墓⁶³出土品（第4図L）と同じである。なお『文物』1995-4の表紙カラー写真（第4図K1）はこの銅帶釦と同じ図柄で着装時右腰にくるものである。別の時に出土したものであろうか。梅花状を呈する寶貝は衣服にとじつけられたものだと簡報にはいうが、銅飾貝帯の貝帯を構成した可能性はきわめて高い。

M13号墓 23才前後の女性。頸に珠飾と寶貝2個、手端と盆骨の下に寶貝16個、五銖錢1枚と銅帶釦1点。寶貝は梅花状に並んでいた。脚端には石帶釦2、寶貝67個など。石帶釦は長10.9、幅7cmのものと同長11.7、幅6.7～6.9cmのもの1対で、両端に1小孔をもつ。銅帶釦は1点、透彫り虎食羊図案、一端に鉤をもつ長11.3、幅5.1cm。銅帶釦と石帶釦にそれぞれ貝帯が伴っていた可能性はあると思う。

石槨墓（22号墓） からは嬰兒。首に珠飾と寶貝2個、腰に透彫佇立状双駝図案の銅帶釦1点と

五銖錢1枚。

墓葬の年代は27基中20基から五銖錢が出土、満城漢墓のものと共通するので西漢中晩期かという。宝貝は27基中23基から出土した。少いものでは1個、多いものでは85個、出土位置からみて衣服にとじつけた装飾かというが、その場所が腰部に近い股間とか手の先などに限られていることよりみて帯飾の可能性を考えるべきだと思う。M10とかM13号墓がよい例であろう。報告者は帯釦に貝帯を伴うことのあることをまったく気付いていないが、これらは帯釦と組合さって鍍金（銅）貝帯を構成していた可能性があると考えられる。

文献によれば元狩二年（B.C.121）「秋、匈奴昆邪王、休屠王を殺しその衆合せて四万余人を将いて来降す。五属国を置き以て之に処す、その地を以て武威・酒泉郡となす」と『漢書・武帝紀』にあるのをはじめとして宣帝の神爵二年（B.C.60）、五鳳二年（B.C.56）、五鳳三年（B.C.55）と相ついで匈奴の部族の漢に投降し、服属するものがあつた。西漢元狩二年に置いた五属国とは天水、安定、西河、五原、張掖の五郡で安定郡内の属国都尉は三水県に治した。『水経注』卷二に「三水県の故城はもと属国都尉の治すところ…西南安定郡を去ること三百四十里…」とあり、安定郡の郡治は高平、現寧夏固原である。三水属国都尉は『水経注』の記述を参考にし、現、同心県一帯にある。倒墩子墓地は西漢時に匈奴の降人を安置した属国都尉の管轄範囲である。これらの墓葬は西漢時期の降漢の匈奴人のだと報告⁶⁴されている。

7 内蒙古烏蘭察布盟察哈爾右翼后旗二蘭虎溝墓

採集したものの中に透彫三鹿紋銅帶釦（第4図G）、長7.3、幅4.7cmのもの1点がある。

8 遼寧省西豊県楽善郷西岔溝⁶⁵

1956年に63基の墓葬を調査した。しかし報告は簡単な略報しかなくどの墓葬から何が出土したか不明である。各種の透彫帯釦（第4図L）の類が出土し、他地域との関連を知るのに重要であるが、帯釦の一部がオールドス青銅器やバンカー氏編集の書物そのほかに載るだけである。紀元前3～2世紀に年代づけられている。

9 内蒙古呼倫貝爾盟滿州里市札賚諾爾⁶⁶

1959年調査時、収集されたものの中に透彫三鹿紋銅帶釦（第4図H）4点が含まれている。

10 黒龍江訥河市二克浅M36号墓⁶⁷

長方形竪穴土坑墓の一基から包金鹿紋帯釦（第4図I）が1点出土した。背面には薄片の木で補ぎなわれ、帯釦と木片の間に革とひも状の縄が残っていた。長7、幅4.5cmである。報告では春秋～戦国早期とする。西漢代のものと思う。

二蘭虎溝、札賚諾爾、訥河の遺跡は鮮卑⁶⁸に関係深いものかと判断する。内モンゴルや陝西などの匈奴に関係深いところでも宝貝を伴う帯釦の出土は、ほとんど確認できない。宝貝を出土するのは寧夏の2ヵ所の遺跡だけである。鍍金（銅）帯釦に貝帯を伴う可能性が高いのは同心倒墩子の例だけで、彼等は漢に降った匈奴だという。そうすると漢代に匈奴や鮮卑の人達が黄金（鍍金・

銅) 飾貝帯を自分達の手で製作したとは考えにくい。それらを製作したのは漢室の工人達で、匈奴の人達はそれを逆に入手したと考えるのが素直な見方であろう。

烏恩によればロシア外バイカルのイボルガ匈奴墓から銅帯釦、銅動物紋透彫帯飾、鉄帯釦、石牌飾と海貝、五銖銭を伴うという記載があり倒墩子に似た印象であるが、海貝と帯釦や帯飾との関係を検討していない。関係の深い研究者にロシア各地から出土する北方系帯釦に貝帯が伴うものかどうかの御教示をお願いしたい。その意味はもう少し後で考えるとして中国の南の方でも北方式青銅器文化の所産になると考えられてきた帯釦がいくつか知られている。それを簡単にみておきたい。

1 四川省成都市石羊西漢木槨墓⁶⁹

長方形竪穴土坑木槨墓で3棺をいれる。一对の浮彫式の銅帯釦(第4図M)が北側の副葬品置場から出土した。跪づく牛を浮彫りにする。背に2個の半環鈕をもつ。長7.5、幅4.6cm。秦半兩と武帝時の有郭半兩を含む、五銖銭はない。時期は元狩五年(B.C.118)以前かと。

2 広州南越王墓⁷⁰

南越国2代目文帝趙昧の主棺室から鍍金銅帯釦1対2点とガラス製帯釦3対6点が出土している。鍍金のもの一龍二亀闘争紋(第4図F1・F2)で周框に麦穂紋を配する。背面に2個の半環鈕、鈕孔内に木の棒が入っていた。出土時どちらの表裏にも包んだほそ絹が残っていた。大小同じで長8.1、幅4.3、厚さ0.4cm。

ガラス帯釦は銅帯釦と同じく玉衣両側の鉄剣の上に置かれていた。武器と一緒に帯釦を置くというのは獅子山楚王陵W1耳室を想起させる。横長の長方形で周框は麦穂紋を凸出して鑄出し鍍金してある。ガラス板の背面は鉄板で作りそれには半環鈕2個がついている。大小同じ長10、幅5、厚さ0.8cm。こわれているのを除くともう1対は長8.7、幅4.3、厚さ0.3cmを測る。

東側室からも一龍二亀闘争紋銅帯釦が1対2点出土。長8.1、幅4.2cm。右夫人のものかと判断される。さらに虎噬羊紋銅帯釦(報告では雌雄両羊盤錯紋様とするが)1対2点も出土。長7.6、幅3.9cm。左夫人のものかと考える。ともに周框に麦穂紋を配する。

南越王墓では墓道の殉人(門衛か)が鍍金虎噬羊紋銅帯釦1対2点(第4図D)、長7.7、幅3.8、厚さ0.3cmを伴っており、さらに同じ鍍金銅帯釦を外蔵槨の殉人(御者か)も1対2点もっている。いずれの場合も宝貝を伴わない。ただ主棺室の文帝は玉衣の上にビーズ飾りをつけた短い上着が覆っていたが、それにはガラス製宝貝や花形金泡などが綴じつけられていたと推定されている。ガラス宝貝70、金花泡32、素金泡13、鍍金銅泡14、銀泡49で1枚の金素泡を中心にガラス宝貝4と4枚の金花泡を配し、貝の后面に1枚の銀泡をくわえる帯飾を3条つくる。珠璣かと考えられているがガラス帯釦3対と対応する花模様をあしらった3条の帯身と考えるべきではないか。獅子山漢墓の帯身が三条に長く横にとじつけられた宝貝の間を金花片で四朵の紋様をつくりだしていたのと同じような帯飾り、ただし宝貝の本場である海南島を支配下においた南越王国では、

ごく目になれた宝貝をそのまま帯身に飾ってもおもしろくないので、わざわざ鉛バリウムガラスを使ってガラス製の宝貝をつくり、北方系文化の所産の帯釦も周框の麦穂紋と鍍金は残して、おもいきってガラス板を鉄板に嵌めこむといった斬新なものを生みだしたと考えられよう。

3 広州市登峰路福建山M1120号墓・M1121号墓

広州市先烈路広州動物園麻鷹崗M1176号墓⁷¹

広州漢墓群の182基の西漢前期墓中、長方形鍍金銅牌と名づけられた帯釦を出土しているのは上記の3基である。ともに1対2点ずつ出土。大小も紋飾も同じ。虎噬羊紋の図柄（第4図C1・C2）で周框は麦穂紋、長7.9、幅3.8cm。M1120号墓とM1121号墓は長方形竪穴木槨墓で帯釦は銅鏡の上に置かれていた。鏡は連觚紋鏡と龍紋鏡である。宝貝の副葬はない。M1176号墓は有墓道竪穴分室木槨墓とされ、帯釦は後室中ほど左よりに玉璧や玉璜などと一緒に出土した。宝貝の記述はない。時期はM1120とM1121号墓が上限は秦始皇二十八年（B.C.219）、下限は文・景帝の期間、趙氏南越王国の前期段階、M1176号墓の上限は文・景帝の間から武帝元鼎六年（B.C.111年）の期間、南越王国の後期に相当するという。南越王墓もこれら広州漢墓も時期的には寧夏同心倒墩子匈奴墓と重なる部分がある。

4 広西省平樂銀山嶺M94号墓⁷²

封土をもつ。山の斜面にあり長方形土坑墓で塾木を置き木棺を置いた。土坑のほぼ中央に長方形の腰坑を掘り陶釜1を埋める。土着越人の風習である。西端に長方形銅牌飾（第3図F）1点と陶釜・壺などを置いてあった。宝貝はない。長さなどの記述はなく、浮彫二馬交纏紋銅帯釦で周框は麦穂紋、背面には2個の小環鈕がある。時期は西漢後期という。

以上嶺南の戦国末～西漢武帝期の主として南越国の墓葬から出土する北方系青銅器文化の帯釦を概観した。南越王のガラス製帯釦とガラス製宝貝が、もしかしたらセットになってガラス飾ガラス貝帯を構成していたかとも考えられることは先にのべた。倒墩子でもみられたが、ガラス宝貝や宝貝は帯身に二条か三条にとじつけられるほか、梅花条に配されていた可能性のあることもこれらよりわかる。

南越王自身いがいの嶺南出土の北方系帯釦はいずれの場合も宝貝を伴わない。ほぼ同時期の匈奴の降人と思える寧夏倒墩子の人は、他の地域の匈奴や鮮卑墓からは、ほとんど発見されることのまれな南海産の宝貝をどこから入手したのであろうか。考えられるルートは2つある。1つは漢王室から宝貝を入手した。あるいは黄金（鍍金・銅）飾貝帯そのものを入手したという考えである。もう1つは南越国と寧夏の匈奴の人達の間で直接・間接の交流があった可能性はどうかという考えである。

武帝によって征服された雲南の滇国では、宝貝を貴重視したことはよく知られている。寧夏倒墩子の宝貝が雲南からもたらされたものという可能性は、武帝を介在させるとあり得ることだが、少なくとも滇国と匈奴の間に直接的な交渉があったとは西漢時期に考えにくい。滇国からも動物園

争紋の図柄の帯飾品⁷³は鍍金のもも含めて多数出土しているが、匈奴や鮮卑など北方系の帯釦に比べて、浮彫りで立体的なものが圧倒的に多く、紋様そのものも濃厚な土着性を帯びていて、北方系そのものも、その影響下のものもない。

嶺南の南越国の宝貝が、直接寧夏の匈奴人の手もとにわたることはあるだろうか。バンカー女史たちは、南越国を建てた趙佗が河北（真定）の人で、嶺南に王国を建てる以前の秦の武将であった段階に、北方系文化と接する機会はあり、南越国から北方系青銅器文化の所産である帯釦が出土するのはそのためだろうとさらりと流しておられる⁷⁴。確かに広州漢墓は北から移住させられた漢人と土着越人の墓群で、南越国の官僚となった移住漢人自身が黄河流域に居住していた頃にそれら北方系帯釦を入手したのかも知れない。

『漢書・匈奴伝』には文帝が匈奴の単于に和親のために贈った数々の品物の中に、「黄金飾具（貝）帯」のあったことは先に何度か触れた。南越の武帝趙佗は秦末の争乱に乗じて嶺南に独立国の南越国を建て王となったが、漢文帝の徳に感じて表面的には臣従したと『史記・南越伝』にはみえる。趙佗から漢文帝に南海産の珍貴なものを贈答することがあって、その中に大量の宝貝が含まれていたという状況は十分想定されることであろう。時代は異なるが同じような状況が三国時代の魏の文帝曹丕と呉王孫権の間にあったことが、『三国志・呉書・孫権伝』に知られる⁷⁵。文帝の即位後、当時蜀と敵対関係にあった孫権は、魏と蜀を同時に相手にできないと判断し文帝に臣従した。黄初二年（221）文帝は使いを遣わして「雀頭香、大貝、明珠、象牙、犀角、瑇瑁、孔雀、翡翠、鬪鴨、長明鶏」を要求したとある。西漢代でも三国時代でも黄河流域の王朝にとっては、南海産の宝貝類は珍貴なあこがれに満ちた産物であったことはまちがいなからう。北方遊牧系騎馬文化を象徴する黄金帯釦と、南海の産物を代表する宝貝を組合せて黄金飾貝帯を作るという発想は、漢王室にこそ可能であったと考える。

戦国時期や秦代にも、内蒙古西溝畔出土の銀虎頭十字形金具や虎豕咬鬪紋黄金帯釦のように、趙国や秦国の官営工房で作られたと判断できる品物があった。西漢代の北方系帯釦のなかにも匈奴や鮮卑の人々によって製作されたものだけでなく、先の宝貝とひっくるめて帯釦のことを考えるという視点が有効なら、漢室の工房で製作されたものを見いだすことができるかどうか検討してみたい。同じ図柄と基本的に思える材料をグループ別に集めた。第1表をみていただきたい。

AからGまでの7タイプの帯釦を集成し、材質と重量、寸法、裏面に布目の痕がついているかどうか、宝貝を伴うかどうかなどに注意した。材質は金、鍍金、銅の3つにわけられ、寸法もその順番で大小が対応している。材質によって帯釦を身につける人の身分、地位に差があったことがわかる。獅子山楚王陵の2セットの帯釦は、セットごとに100gほど重さに差がある。バンカー女史らによると一方のセットの帯釦は裏面に布目痕がついていないという⁷⁶。布目は蠟原型の台座として使用されたと彼女らは考えており、金の重量を減らすための工夫だといわれる。戦国時代の西溝畔2号墓から出土した秦国所産と思える虎豕鬪争紋金帯釦も裏面に布目痕がついていた。

第1表 漢代動物（闘争）紋帯釦

A 二獸噬馬紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	獅子山楚王陵1	黄金	13.3×6×0.3	390	裏面布目なし	貝帯を伴う	帯釦1対
		〃	〃	358	〃	宝貝3列	金針1か
2	獅子山楚王陵2	黄金	〃	280	裏面に布目痕	貝帯を伴う	帯釦1対
		〃	〃	275	〃	宝貝3列	銀針1か
3	西安三店村	鍍金	11.2×5×0.3			宝貝1個	帯釦1対
		〃	〃				
4	南ウラルポクロフカ	銅?					

B 群羊頭紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	宛胸侯劉執墓	黄金	9.1×5	1対と金針 1で309	周框に麦穂紋	貝帯を伴う 宝貝30余個	帯釦1対
		〃					
2	遼寧西岔溝	鍍金			周框なし		
3	スウェーデン極東古物博物館蔵	銅			周框なし		

C 虎噬羊紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	重慶巫峽M3	鍍金	10.7×5.2×0.5		裏面に布目か	貝帯を伴う 宝貝2列66個	帯釦1対
			10.75×5.2×0.5				
2	寧夏倒墩子M14	銅	9.6×4.5		周框に麦穂紋	鼻孔内に宝貝 各1個	帯釦1点のみ
3	広州南越王墓 墓道殉人	鍍金	7.7×3.8×0.3		麦穂紋		帯釦1対
4	広州南越王墓 外蔵槨殉人	鍍金	7.7×3.8×0.3		麦穂紋		帯釦1対
5	広州南越王墓 東側室左夫人	銅	7.6×3.9		麦穂紋		帯釦1対
6	広州福建山 M1120号墓	鍍金	7.9×3.8		麦穂紋		帯釦1対
7	広州福建山 M1121号墓	鍍金	7.9×3.8		麦穂紋		帯釦1対
8	広州麻鷹崗 M1176号墓	鍍金	7.9×3.8		麦穂紋		帯釦1対

D 一龍二亀闘争紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	寧夏倒墩子M14	鍍金	9×5		周框に麦穂紋	鼻孔中に2個	帯釦1対
2	南越王墓主棺室	鍍金	8.1×4.3×0.4		正背面に布痕 周框に麦穂紋		帯釦1対
3	南越王墓東側室 右夫人	銅	8.1×4.2				帯釦1対

E 二馬交纏紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	寧夏倒墩子M19	鍍金	10.6×5.3		麦穂紋	宝貝40個を伴う 貝帯の可能性大	帯釦1対
2	広西平樂銀山嶺M94	銅			麦穂紋		1点だけ
3	朝鮮平壤梧野里 土取場古墳	鍍金	10×5		麦穂紋		
4	遼寧西岔溝	鍍金			麦穂紋		二馬の上に鳥か羊の横む き一列の集団を配する。
5	シベリアコレクション	銅?			麦穂紋		1点

F 三鹿紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	内蒙古二蘭虎溝	銅					
2	内蒙古札賚諾爾	銅					
3	黒龍江訥河	鍍金	7×4.5				1点
4	スウェーデン極東 古物博物館	銅					
5	シベリアコレクション	銅					

G 武士捉俘虜紋帯釦

	出土地	材質	長×幅×厚cm	重量g	特徴	宝貝の有無	備考
1	寧夏倒墩子M10	銅	10.7×4.7~6.8				
2	遼寧西岔溝						

そうすると布目痕のついている帯釦は黄河流域の中国文化の所産であり、獅子山漢墓でも布目の痕の裏面についていないセットは遊牧文化の所産であると言えるのだろうか。この点についてはバンカーさん達は何もいっていない。宝貝を二列もしくは三列、あるいは金片や銀片と梅花状に構成して帯身を飾った。その工夫は西漢の王室工房で行われたものだと考えてまちがいないと考える。

興味深いのはBの群羊頭紋帯釦としたグループである。遼寧西岔溝出土例は周框をもたない。徐州宛胸侯執墓のは同じような図柄を本体に採用しながら周框に麦穂紋と中国の研究者がよぶ綾杉紋をめぐらせ、金製品にしている。おそらく西岔溝匈奴墓のものが古くて西漢の王室工房がそれをモデルにして新しいものを材質とデザインを少しかえて、帯身に宝貝をとじつけた貝帯として製作したものであろう。宛胸侯執は獅子山楚王陵に葬られた劉戊とともに呉楚七国の乱に加わり、ともに自殺したとも殺されたともいわれていることは先に触れた。呉楚七国の乱に先立ち、両国は趙王遂と誼みを通じ、趙王は呉楚が反乱を起した時は匈奴を手引して戦いに参加させる手

筈になっていたと『史記・楚元王劉交伝』にはある。戦いが3か月で敗れたので国境まで出動した匈奴軍は長城内にたちいることなくひきあげたと。獅子山楚王陵や宛胸侯執墓からの北方系帯釧の出土をこの『史記』の記載をもとに、呉楚と趙と匈奴の友好的な関係から匈奴から贈られたものかとも考えたが、景帝陵従葬坑の陶俑武人の身につけていること、『史記』や『漢書』の「匈奴伝」にみる文帝の対匈奴への贈物の品目にみられる「黄金飾具帯」のことを考えるとこれらの帯釧は漢王室工房製品と判断した方が良いかと思う。ただ獅子山楚王陵出土の玉衣の玉は、当時月氏や月氏を西へ追い払った匈奴の支配下の地を通らないと手に入らないホータンの玉だということを理由に、劉戊と匈奴の関係を云々するむき⁷⁷もある。玉の産地と交易の問題はくわしい方の教をを請いたい。

いずれにしる北方系動物紋帯釧のなかには戦国期から西漢にかけて、北方系のものをモデルにしてそれを模倣して、あるいはそれに似せて、あるいは少し別の要素をつけたして戦国期の秦や趙、西漢時期の漢王室のそれぞれ官営工房で製作されたものが存在している。それは林胡や樓煩、西戎の首長たちに対する、西漢代では匈奴の単于に対する贈物だったり交易品だった。そしてそれらを漢人自身もバンカーさんたちのいい方を借用するなら、異国趣味に満ちた、漢人に興味を呼びおこさせる帯釧を作った。先にも触れたが北方遊牧文化を代表する動物闘争紋帯釧と、南海を代表する宝貝を組合せて中華の産物として黄金飾具帯を生み出したものであろう。

春秋戦国の黄金具帯と西漢の黄金飾具帯

胡服騎射について王仁湘⁷⁸は、文献に記載された中原諸侯の騎兵採用は趙武靈王より以前にすでに各国で始まっていたとする。劉向は戦国に騎あれども騎射なし。騎射は胡兵なり。趙武靈王は之を用うとした。王氏は帯鉤の発明は胡人かどうかと聞いて帯鉤は早くに春秋早・中期に齊・魯などで用いられたことをいう。武靈王の俗を胡服にかえ騎射を習うことのポイントは騎馬だけにあるのではなくて、身なりそのものを変えて胡と同じにする決定をしたことにある。先にも触れたが「今、中山は我が腹心に在り、燕の北に東胡あり、西に林胡と樓煩は秦・韓の辺にあり、疆兵の救い無くんば是れ社稷を亡ぼさん、…吾れ胡服を欲するなり」と群臣を説きふせて風俗を変えた。その結果武靈王二十年中山を略し、西は林胡王が馬を献上するまでの成果を得た。二十五年には王子何に傳たらしむ周紹（昭）に胡服衣冠、具帯、黄金飾比を下賜した。二十六年（B.C.300）北は燕・代に西は雲中・九原に至った。王位を後妻の子、王子何（恵文王）に譲り自分は胡服して士大夫を装い西北の胡地を略し、雲中・九原より直に南下して秦を襲おうと下見のために潜入した⁷⁹とある。征服し服属した胡人に自国の工房で製作した胡風の帯釧や十字形金具や辻金具の類を贈ったり、下賜したことは十分ありえた。それが西溝畔の銀虎頭十字形金具や河北易県辛庄頭戦国墓出土⁸⁰の胡人頭像紋金飾件や羊紋銀飾件の製作動機であらう。

秦では戦国時期、西溝畔出土の黄金帯釦（具帯）を作り、寧夏固原県三營公社紅庄出土の馬と鳥紋からなる黄金帯釦は、ほぼそれと同じ土製鑄型の原型が西安北郊の北康村の鑄造工匠墓から発見されている。秦長城のすぐ外側に位置する西戎の部族の首長や、趙国を亡ぼしたあと服属した樓煩の首長に、北方系青銅器文化の中でも目に立つ黄金具帯を製作し、下賜したりすることのあったことがわかる。それらの遺跡や遺物はほとんど宝貝を伴わない。春秋・戦国時の北方系青銅器文化の帯釦は黄金具帯とよばれた可能性が高いと考える。少くとも具帯とよぶ積極的証拠は考古学的には見あたらない。

『史記・匈奴伝』によれば、漢楚の戦いに勝利した劉邦はその勢いを駆って匈奴と一戦をまじえた。当時、長城以北の地では匈奴に冒頓単于が出現し、東は東胡を従え西は月氏を撃破して一大勢力を形成した。期せずして長城を挟んで、以南が漢帝国に統一されたのに拮抗する情勢となった。高祖は平壤（今の山西省大同市東北）で包囲され、貢物を贈ってやっと、閼氏の取りなしでかろうじて匈奴の重圍から脱出した。以後、宗室の女公主を単于の閼氏とし年々に絮、繒、酒・米・食物など数々のものを送り昆弟の約を結んで和親した。その方針は惠帝、呂太后の時も守られた。

さらに文帝の時、月氏を滅した冒頓単于に対して前六年（B.C.174）、漢と匈奴が結んでいた兄弟の約を再確認し、「服繡袷綺衣、繡袷長襦、錦袷袍各一、比余一、黄金飾具帯一、黄金胥紕一、繡十匹、錦三十匹、赤紕、緑繒各四十匹」を中大夫の意、謁者令の肩をして単于に遣った。天子の服するところの衣を含めて冒頓に賜ったのだとある。

後しばらくして冒頓は死亡し子の稽粥が立った。老上単于である。文帝は宗室の女公主を閼氏として遣し、宦官の燕人、中行説をいやがるのに送りこんだ。降った中行説の影響で老上単于は文帝の十四年以後たびたび侵寇をくり返した。後また和親が結ばれた。老上のあと軍臣単于が立ちまた和親が破れた。文帝が亡くなったあと景帝が立ち、呉楚七国の乱に乗じて趙王遂は匈奴を長城内に導き入れることを企てたが、事は敗れ匈奴も長城からひき返した。景帝は歴代の皇帝のように匈奴と和親を結び平穩にすぎたという。

武帝の代になって匈奴政策は一転し、匈奴と戦う方向に転じた。その後匈奴は建武二十四年（48）には南北に分裂し、南匈奴は東漢の冊封を受けるにいたる。北匈奴は遠く北や西に去った。匈奴の支配下にあった中国北方の草原地帯には烏桓のあとを襲った鮮卑がその勢力をひろげ、慕容鮮卑は華北に北魏王朝をたてることになるのは、東漢から三国・西晋にかけての漢人の対北方遊牧民に対する政策とも深いかわりのあることである⁸¹。

これらの漢と匈奴のかかわりあいの中で、和親の贈答品として遊牧文化を代表する黄金帯釦と南海を代表する宝貝を組合せて、中華の産物として黄金飾具帯を製作し、漢人自らもそれを着用し、匈奴首長や後には降った匈奴の酋長に贈ったり、下賜したりすることはあった。この場合は黄金飾具帯というよりは黄金飾具帯というのがよいのではないかと思う。

各種文献での貝帯と具帯の混乱はもしかしたら司馬遷にしても班固にしても劉向にしても武帝と同時代か以後の人達で、黄金飾貝帯が主として製作されていた文帝・景帝の時代と少しずれていたために、春秋戦国時の黄金具帯と混乱を生じたのではないかと思うが、蛇足かも知れない。ながく論じたが文化変容の一端が漢人と塞外民族の間に、先に別稿で論じた死者の顔を覆面する風習⁸²の採用のように、ここでも見受けられ相互の文化のからみあいの根の深さを垣間見る思いがする。(2005年2月13日稿了)

注

- 1 王国維「胡服考」『觀堂集林』卷第二十二、(王忠愨公遺書内編) 1914年
- 2 徐州博物館「徐州獅子山兵馬俑坑第一次発掘簡報」『文物』1986-12
- 3 a 獅子山楚王陵考古発掘隊「徐州獅子山西漢楚王陵発掘簡報」『文物』1998-8
- 3 b 鄒厚本・韋正「徐州獅子山西漢墓的金釧腰帶」『文物』1998-8
- 3 c 韋正・李虎仁・鄒厚本「江蘇徐州市獅子山西漢墓的発掘与収獲」『考古』1998-8
- 4 朱捷元・李域錚「西安東郊三店村西漢墓」『考古与文物』1983-2
- 5 東京国立博物館・朝日新聞社『中国国宝展』2004年9月、図版63
- 6 Kathryn M. Linduff, Emma C. Bunker, Wu En, 'An Archaeological Overview', "Ancient Bronzes of the Eastern Eurasian Steppes from the Arthur M. Sackler Collections" 1997, New-York, The Arthur M. Sackler Foundation.
- 7 a 烏 恩「我国北方古代動物紋飾」『考古学報』1981-1
- 7 b 烏 恩「中国北方青銅透雕帶飾」『考古学報』1983-1
- 7 c 烏 恩「殷至周初的北方青銅器」『考古学報』1985-2
- 7 d 烏 恩「論匈奴考古研究中的幾個問題」『考古学報』1990-4
- 7 e 烏 恩「夏家店上層文化芸術初探」『内蒙古文物考古』1993-1・2
- 7 f 烏 恩「欧亜大陸草原早期游牧文化的幾点思考」『考古学報』2002-4
- 7 g 烏 恩「論中国北方早期游牧人青銅帶飾的起源」『文物』2002-6
- 8 a 孫 機「我国古代的革帶」『文物与考古論集』文物出版社、1987年
- 8 b 孫 機「先秦、漢、晋腰帶用金銀帶釧」『文物』1994-1
- 9 a 田広金「近年来内蒙古地区的匈奴考古」『考古学報』1983-1
- 9 b 田広金・郭素新『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社、1986年5月
- 10 『中国文物精華』編集委員会編『中国文物精華』文物出版社、1990、図版158
- 11 a 近藤喬一「商代宝貝の研究」『アジアの歴史と文化』第二輯、山口大学アジア歴史・文化研究会、1995年
- 11 b 近藤喬一「西周時代宝貝の研究」『アジアの歴史と文化』第三輯、山口大学アジア歴史・

文化研究会、1999年

- 12 平尾良光編『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂、2001年2月のP237、写真9
- 13 a 山西省考古研究所『侯馬鑄銅遺址』上・下、文物出版社、1993年11月
- 13 b 山西省考古研究所侯馬工作站「1992年侯馬鑄銅遺址發掘簡報」『文物』1995—2
- 14 孫 機前引注8a論文
- 15 中国社会科学院考古研究所編『陝東周秦漢墓』科学出版社、1994年
- 16 洛陽市文物工作隊「洛陽市西工区C1M3943戦国墓」『文物』1999—8
- 17 烏 恩 前引注7d論文
- 18 田広金「桃紅巴拉的匈奴墓」『考古学報』1976—1
- 19 内蒙古文物考古研究所「凉城崞县窑子墓地」『考古学報』1989—1
- 20 内蒙古文物工作隊「毛慶溝墓地」『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社、1986年5月
- 21 a 伊克昭盟文物工作站・内蒙古文物工作隊「西溝畔匈奴墓」『文物』1980—7
- 21 b 田広金・郭素新「西溝畔匈奴墓反映的諸問題」『文物』1980—7
- 22 Emma C. Bunker 前引注6論文
- 23 黄盛璋「新出戦国金銀器銘文研究（三題）」『古文字研究』第十二輯、1985年
- 24 烏 恩 前引注7d
- 25 田広金・郭素新「内蒙古阿魯柴登發現的匈奴遺物」『考古』1980—4
- 26 Emma C. Bunker 前引注6論文
- 27 孫 機 前引注8b論文
- 28 Emma C. Bunker 前引注6
- 29 Emma C. Bunker 前引注6
- 30 陝西省考古研究所「西安北郊戦国鑄銅工匠墓發掘簡報」『文物』2003—9
- 31 以下の見解は田広金ら前引9bによる。
- 32 a 寧夏文物考古研究所など「寧夏固原楊郎青銅文化墓地」『考古学報』1993—1
- 32 b 鍾 侃「寧夏固原県出土文物」『文物』1978—12
- 33 寧夏文物考古研究所「寧夏彭堡于家庄墓地」『考古学報』1995—1
- 34 鐘 侃・韓孔榮「寧夏南部春秋戦国時期的青銅文化」『中国考古学会第四次年会論文集』文物出版社、1983、図版拾貳・2
- 35 寧夏回族自治区文物考古研究所ほか「寧夏彭陽県張街村春秋戦国墓地」『考古』2002—8
- 36 靳楓毅・王繼紅「山戎文化所含燕与中原文化因素之分析」『考古学報』2001—1
- 37 河北省博物館ほか「河北平泉東南溝夏家店上層文化墓葬」『考古』1977—1
- 38 北京市文物研究所山戎文化考古隊「北京延慶軍都山東周山戎部落墓地發掘紀略」『文物』1989—8

- 39 靳楓毅ら前引注36論文
- 40 張家口市文物事業管理所ほか「河北宣化県小白陽墓地発掘報告」『文物』1987-5
- 41 靳楓毅ら前引注36論文
- 42 河北省文化局文物工作隊「河北懷来北辛堡戦国墓」『考古』1966-5
- 43 遼寧省文物考古研究所「遼寧凌源県五道河子戦国墓発掘簡報」『文物』1989-2
- 44 中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「寧城南山根遺址発掘報告」『考古学報』1975-1
- 45 山戎や東胡の青銅器文化については近藤喬一「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史』資料編・考古I、2000年3月参照
- 46 陝西省博物館「介紹陝西省博物館收藏的几件戦国時期的秦器」『文物』1966-1
- 47 河北省文物研究所『燕下都』上・下、文物出版社、1996年
- 48 三店村の報告で鍍金銅帯釦の写真が『考古与文物』1983-2、図版染・2に一对掲載されているが、穿孔のない方も馬の顔が左向きで実測図と異なり裏焼きと思える。獅子山楚王陵例と同じく帯釦の図柄は着装した時、馬が顔をむきあう構図である。『文物』1998-8の鄒厚本・韋正氏の復原図もこのままだと馬がお尻をむきあう形になるのでまちがっている。
- 49 徐州博物館「徐州西漢宛胸侯劉執墓」『文物』1997-2
- 50 Emma C. Bunker 前引注6、Fig. A110.
- 51 四川省文物考古研究所・巫山県文物管理所・重慶市文化局三峡文物保護工作領導小組「重慶巫山県巫峡鎮秀峰村墓地発掘簡報」『考古』2004-10
- 52 黄展岳「关于両広出土北方動物紋牌飾問題」『考古与文物』1996-2
- 53 a 陝西省考古研究所「漢景帝陽陵南区從葬坑発掘第一号簡報」『文物』1992-4
- 53 b 陝西省考古研究所漢陵考古隊「漢景帝陽陵南区從葬坑発掘第二号簡報」『文物』1994-6
- 54 近藤喬一前引注11論文
- 55 伊克昭盟文物站・内蒙古文物工作隊「西溝畔漢代匈奴墓地調査記」『内蒙古文物考古』創刊号、1981
- 56 田広金ら前引注9b
- 57 龐 昊「翁牛特旗発現兩漢銅牌飾」『文物』1998-7
- 58 中国科学院考古研究所編『禮西発掘報告』1955-1957年陝西長安県禮西郷考古発掘資料、文物出版社、1962
- 59 寧夏文物考古研究所ほか「寧夏同心県李家套子匈奴墓清理簡報」『考古与文物』1988-3
- 60 a 寧夏回族自治区博物館ほか「寧夏同心県倒墩子漢代匈奴墓地発掘簡報」『考古』1987-1
- 60 b 寧夏文物考古研究所ほか「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古学報』1988-3
- 61 広西壮族自治区文物工作隊「平樂銀山嶺漢墓」『考古学報』1978-4
- 62 梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』第三卷、養徳社、1959年7月

- 63 孫守道「“匈奴西岔溝文化” 古墓群的發現」『文物』1960—8・9
- 64 寧夏文物考古研究所ほか前引注60b
- 65 孫守道前引注63
- 66 內蒙古文物工作隊『內蒙古文物資料選輯』內蒙古人民出版社、1964年4月
「察右后旗二蘭虎溝的古墓群」
「札賚諾爾古墳群（上）（下）」
- 67 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江訥河市二克淺青銅時代至早期鐵器時代墓葬」『考古』
2003—2
- 68 孫 危「內蒙古地區鮮卑墓葬的初步研究」『內蒙古文物考古』2001—1
- 69 胡昌鈺「成都石羊西漢木槨墓」『考古與文物』1983—2
- 70 a 廣州文物管理委員會ほか『西漢南越王墓』文物出版社、1991年10月
- 70 b 近藤喬一「漢代諸侯王・列侯の墓制と鏡」『郵政考古紀要』第35号、2004年11月
- 71 廣州市文物管理委員會ほか『廣州漢墓』上・下、文物出版社、1981年12月
- 72 廣西壯族自治區文物工作隊前引注61
- 73 中國青銅器全集編集委員會編『中國青銅器全集』14、滇・昆明、文物出版社、1993年12月
- 74 Emma C. Bunker前引注6
- 75 近藤喬一『三角緣神獸鏡』東京大學出版會、1988年12月
- 76 Emma C. Bunker前引注6
- 77 王雲度「獅子山漢墓墓主劉戊說疑」『陝西歷史博物館館刊』第五輯、1998年6月
- 78 a 王仁湘「帶扣略論」『考古』1986—1
- 78 b 王仁湘「古代帶鈎用途考實」『文物』1982—10
- 79 『史記』趙世家
- 80 石永士・王素芳「燕文化簡論」『內蒙古文物考古』1993—1・2
- 81 近藤喬一「三國兩晉の墓制と鏡」『アジアの歴史と文化』第七輯、山口大學アジア歴史・文化研究会、2003年3月
- 82 近藤喬一「中国古代に於ける鏡の副葬」—漆面罩を中心にして—『アジアの歴史と文化』
第八輯、山口大學アジア歴史・文化研究会、2004年3月

図出典

第1図

- A 1・A 2 獅子山楚王陵考古發掘隊「徐州獅子山西漢楚王陵發掘簡報」『文物』1998—8
- A 3 鄒厚本・韋正「徐州獅子山西漢墓的金釧腰帶」『文物』1998—8
- B 1～B 3 徐州博物館「徐州西漢宛胸侯劉執墓」『文物』1997—2

- C 陕西省考古研究所漢陵考古隊「漢景帝陽陵南区從葬坑發掘第二号簡報」『文物』1994—6
 D 1～D 4 四川省文物考古研究所ほか「重慶巫山県巫峽鎮秀峰村墓地發掘簡報」『考古』2004—10

第2図

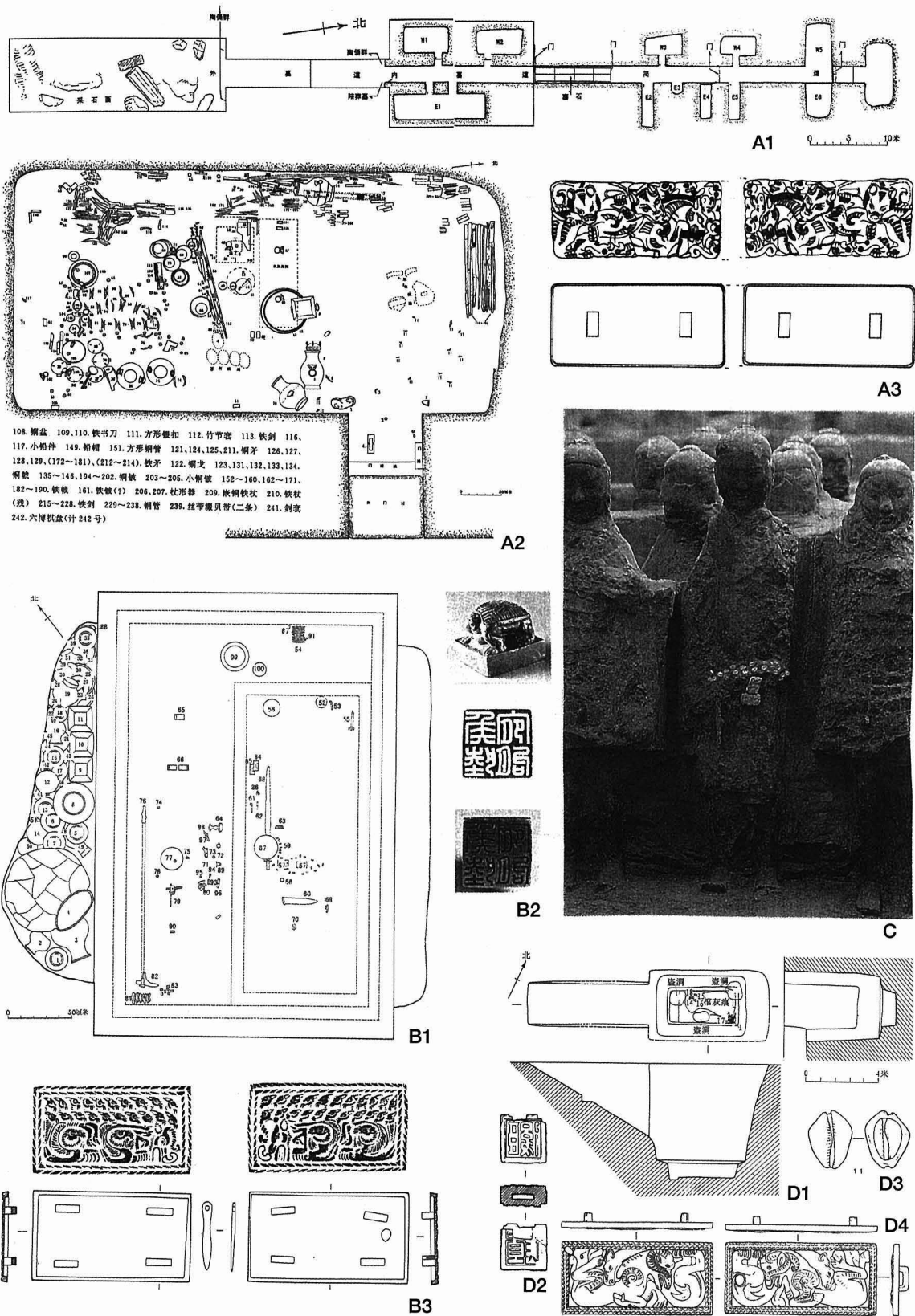
- A 平尾良光ら『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂、2001年
 B 山西省考古研究所『侯馬鑄銅遺址』文物出版社、1993年
 C 中国社会科学院考古研究所『陝東周秦漢墓』科学出版社、1994年
 D 洛陽市文物工作隊「洛陽市西工区C 1 M3943戦国墓」『文物』1999—8
 E C文献に同じ
 F 田広金・郭素新『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社、1986年
 孫機「先秦、漢、晋腰带用金銀帶釦」『文物』1994—1
 G 石永士・王素芳「燕文化簡論」『内蒙古文物考古』1993—1・2
 H 文献Fと同じ
 I 陕西省考古研究所「西安北郊戦国鑄銅工匠墓發掘簡報」『文物』2003—9
 J 文献Fに同じ
 K 鐘侃・韓孔榮「寧夏南部春秋戦国時期的青銅文化」『中国考古学会第四次年会論文集』文物出版社、1983年
 L 陕西省博物館「介紹陕西省博物館收藏的幾件戦国時期的秦器」『文物』1966—1

第3図

- A 1 鄒厚本・韋正「徐州獅子山西漢墓的金釦腰帶」『文物』1998—8
 A 2・A 3 東京国立博物館・朝日新聞社『中国国宝展』2004年9月
 B 1・B 2 朱捷元・李域錚「西安東郊三店村西漢墓」『考古与文物』1983—2
 C 1～C 5 徐州博物館「徐州西漢宛胸侯劉執墓」『文物』1997—2
 D 1 田広金・郭素新『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社、1986年
 D 2 江上波夫・水野清一『内蒙古・長城地帯』東亜考古学会、1935年
 E 1・E 2 寧夏文物考古研究所ほか「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古學報』1988—3
 F 広西壮族自治区文物工作隊「平樂銀山嶺漢墓」『考古學報』1978—4
 G 梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』第三卷、養徳社、1959年
 H D 1文献に同じ

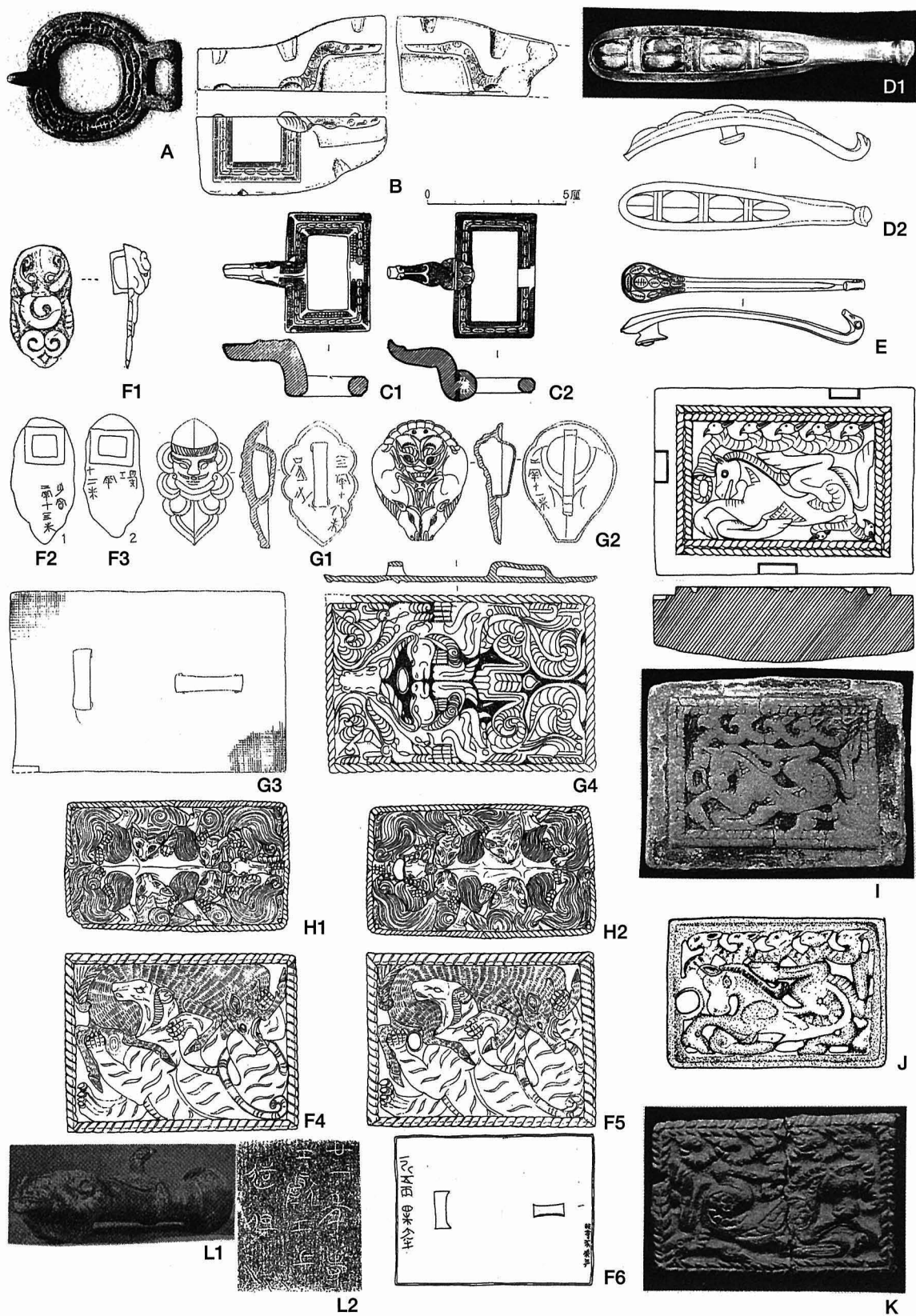
第4図

- A 1・A 2 四川省文物考古研究所ほか「重慶巫山県巫峽鎮秀峰村墓地発掘簡報」『考古』
2004-10
- B 寧夏文物考古研究所ほか「寧夏同心倒墩子匈奴墓地」『考古学報』1988-3
- C 1 広州市文物管理委員会ほか『広州漢墓』文物出版社、1981年
- C 2 孫機「先秦、漢、晋腰带用金銀帶釦」『文物』1994-1
- D 広州文物管理委員会ほか『西漢南越王墓』文物出版社、1991年
- E 文献Bに同じ
- F 1 文献C 1に同じ
- F 2 文献C 2に同じ
- G 内蒙古文物工作隊『内蒙古文物資料選輯』内蒙古人民出版社、1964年
- H 文献Gに同じ
- I 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江訥河市二克浅青銅時代至早期鉄器時代墓葬」『考古』
2003-2
- J 江上波夫・水野清一『内蒙古・長城地帯』東亜考古学会、1935年
- K 1 『文物』1995-4の表紙カラー写真
- K 2 文献Bに同じ
- L 孫守道「“匈奴西岔溝文化” 古墓群的発現」『文物』1960-8・9
- M 胡昌鈺「成都石羊西漢木槨墓」『考古与文物』1983-2
- N・O 龐昊「翁牛特旗発現兩漢銅牌飾」『文物』1998-7
- P 中国科学院考古研究所『禮西発掘報告』文物出版社、1962年



第1图 西汉黄金(镀金·铜)饰贝带出土遗构

A 1~3 徐州狮子山楚王陵 B 1~3 徐州宛胸侯墓
C 景帝阳陵从葬坑20号坑 D 1~4 重庆巫峡臣后墓

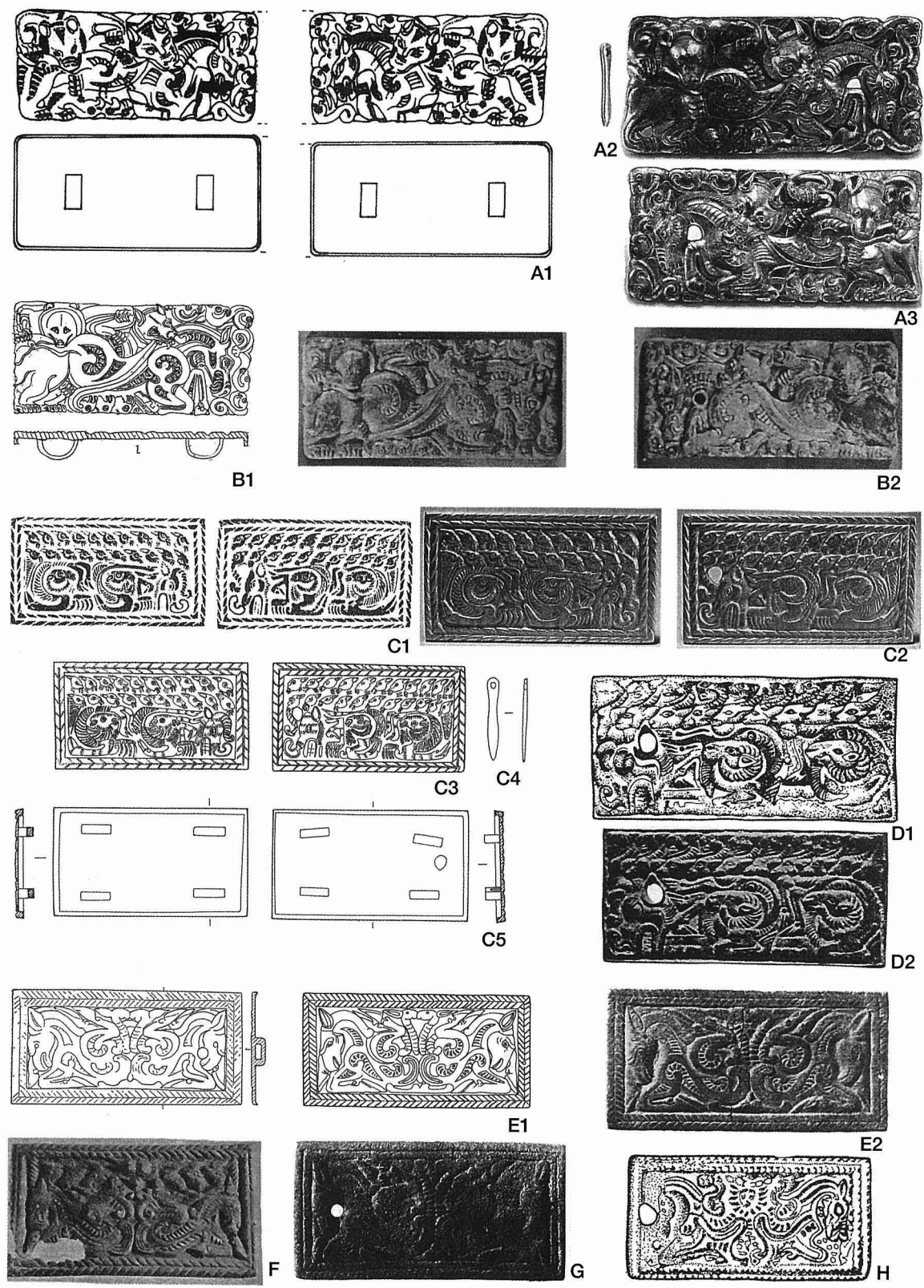


第2図 春秋・戦国の帯釦・帯鉤・十字形金具

A 東京国立博物館蔵鳥形帯釦
 D 洛陽西工区C 1 M3943号墓
 G 河北易県辛庄頭M30号墓
 J シベリアコレクション

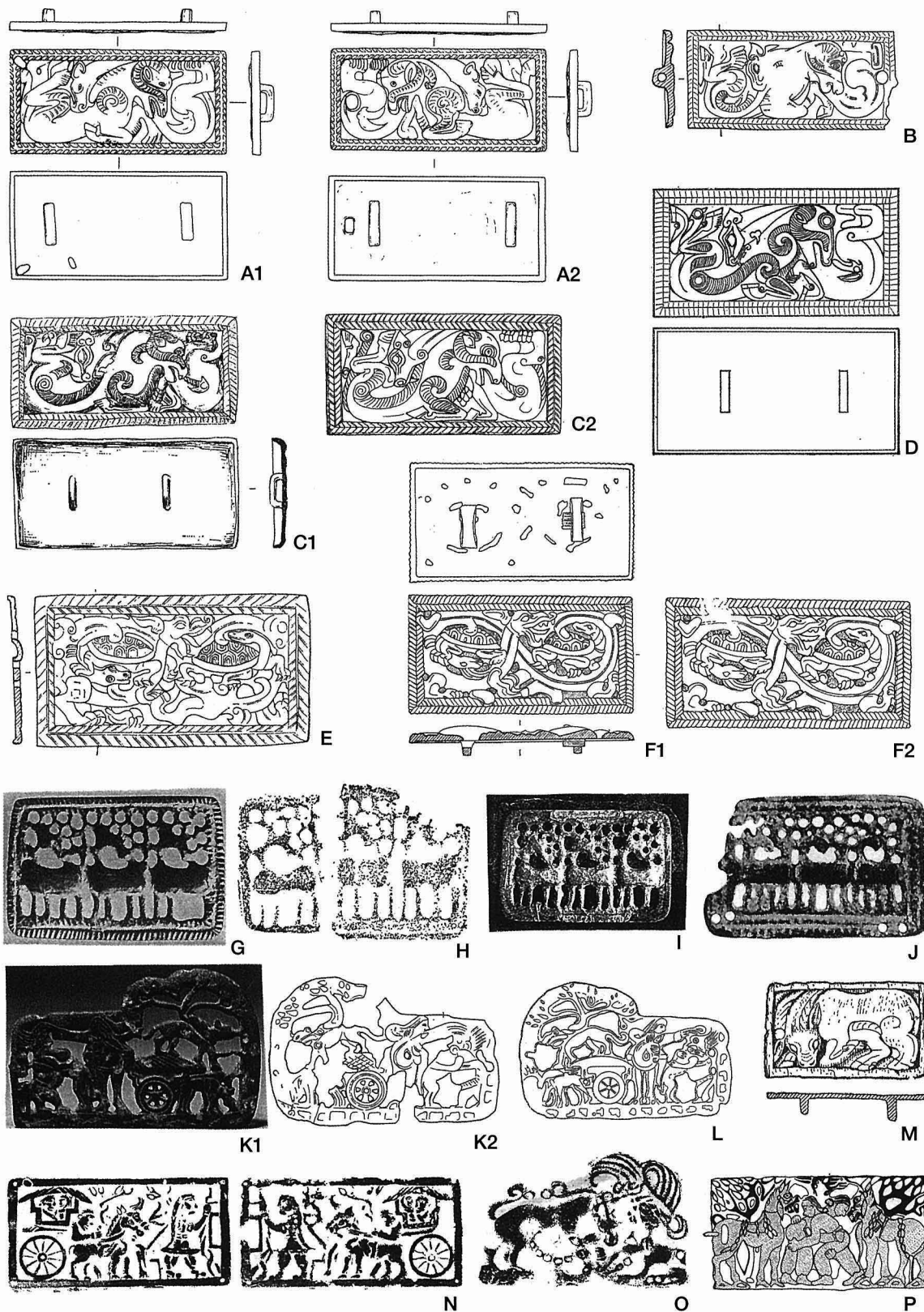
B 山西侯馬出土方策鑄型
 E 河南陝県后川M2148号墓
 H 内蒙古阿魯柴登古墓
 K 寧夏固原県

C 河南陝県后川M2040号墓
 F 内蒙古西溝畔M 2号墓
 I 西安北康村戦国鑄銅工匠墓
 L 西安三橋后園寨村出土



第3図 西漢黄金(鍍金・銅)帯釦

- | | | |
|-----------------|--------------|----------------|
| A 徐州獅子山楚王陵 | B 西安三店村王許墓 | C 徐州宛胸侯劉執墓 |
| D スウェーデン極東古物博物館 | E 寧夏倒墩子M19号墓 | F 廣西平樂銀山嶺M94号墓 |
| G 朝鮮平壤梧野里 | H シベリアコレクション | |



第4図 西漢(東漢)鍍金・銅帶釦

- | | | |
|-----------------|----------------|----------------|
| A 重慶巫峽秀峰村臣后墓 | B 寧夏倒墩子M14号墓 | C 広州福建山M1120号墓 |
| D 広州南越王墓墓道殉人 | E 寧夏倒墩子M14号墓 | F 広州南越王墓主棺室 |
| G 内蒙古二蘭虎溝 | H 内蒙古札賚諾爾 | I 黒龍江訥河 |
| J スウェーデン極東古物博物館 | K 寧夏倒墩子(M10号墓) | L 遼寧西豊西岔溝 |
| M 四川成都石羊 | N 内蒙古翁牛特旗 | O 内蒙古翁牛特旗 |
| | | P 陝西禮西 |